

令和 2年 6月24日
防衛大学校同窓会機関紙

Vol. 27

小原台だより



(日豪士官候補生ラグビーマッチ)

電子版第5号

CONTENTS

■防衛大学校同窓会長からのご挨拶	3
■会長ルーム・活動録	
令和元年度第3、4学年部隊実習激励	5
日豪士官候補生ラグビーマッチ激励	8
防衛大学校令和元年度開校記念祭等参加	11
防衛大学校本科卒業留学生交流会レセプション等参加	13
■防衛大学校関連	
新幹事に聞く	15
防衛大学校第67期期生会設立総会参加	18
■同窓生は今	
第63期生に聞く	21
今人生、男盛り（第25期生）	30
第2期生からのメッセージ	43
■活動報告	
第7期生ホーム・カミングデー2（HCD2）	45
第43期生ホーム・ビジット・デー（HVD）	51
令和元年度防衛大学校同窓会臨時代議員会	54
■連絡事項	
平成30年度防衛大学校同窓会決算書	65
令和2年度期生会長・代議員名簿	67
令和2年度同窓会本部役員名簿	69
令和2年度地域支部等役員名簿	70
令和2年度事務局員名簿	72
令和2年度小原台事務局員名簿	73
会則改正（目的及び事業、寄付手続き、地域支部支援）	74
■編集後記	84

■防衛大学校同窓会長からのご挨拶

防衛大学校同窓会会員の皆様におかれましては、現職そしてOBそれぞれ各分野・各方面でご活躍の事と拝察申し上げます。私は昨年の4月から同窓会会長を拝命しております岩崎です（第19期、航空要員、航空工学、グライダー部、岩手県出身）。今年度も昨年度同様に私以下同窓会役員一同、同窓会の更なる充実・発展の為に邁進する所存です。宜しくお願い申し上げます。



はじめに、同窓会会員の皆様方にお詫び申し上げます。今年3月7日に予定していた同窓会代議員会ですが、昨今の新型コロナウイルス感染症対策の政府基本指針に基づき中止させて頂きました。多くの代議員や地域支部長等の皆様には多大なご迷惑をおかけいたしました。また同時に、この私どもの判断に対し皆様からご理解を頂きましたことに感謝申し上げます。

さて、令和2年度事業の開始に当たり、同窓会代議員会で私が申し上げたかった事等を皆様方にお伝えしたいと思います。

最初に、防衛大学校の近況についてです。わが母校である防衛大学校は、これまで多くの方々のご努力により素晴らしい大学校となってきました。特に、國分良成学校長をお迎えし、「新たな高みプロジェクト」を目標に掲げ各種活動を本格化させ、目覚ましい発展を遂げております。これまでの学生の自主自律の精神をより進化させるとともに、国際交流センター設立、グローバル・セキュリティ・センター立ち上げ、先端学術推進機構新設等々、時代の変化に即応した組織の改編を進めてきており、正に将来の「General」として申し分ない学生が育ってきております。最近では、各国の士官学校等に留学する防衛大学校学生数は年間60名を越え、国際的視野を広げつつ各国との防衛交流や信頼性向上にも貢献してきております。この中で派遣された防衛大学校学生の多くは極めて優秀な成績を残しております。特に、一昨年アメリカ合衆国海軍兵学校（The US Naval Academy）に派遣された学生は、期間内で最優秀学生になるなど、世界に誇れる防衛大学校となってきました。同時に、外国からの防衛大学校への留学生数も年々多くなり、現時点（令和2年4月1日現在）での防衛大学校で学んでいる留学生数は100名を越えるほどになっています。これは防衛大学校が各国からも高い評価を受けている証左と言えるでしょう。これまでに既に444名（令和2年4月1日現在）の留学生が卒業しており、今後この数は急激に増加していくものと思います。

昨年11月、防衛大学校を卒業し各国の軍で活躍している約50名の卒業留学生を再度日本に招待する事業が行われました。再来日された留学生達は2名の少将を筆頭に、昨年卒業した中尉までのメンバーで、来日当日夕方、総理官邸での安倍総理主催レセプションに招かれました。安倍総理から「このような企画は大変素晴らしい事であり、防衛大学校と各国留学生との交流を更に深化させるとともに、我が国と留学生の国々とのネットワークを

形成する上で重要な試みである。」とのご趣旨のお言葉を頂きました。翌日は母校を訪問し、最近の防衛大学校の概要説明や午後の課業行進や施設の視察等々のスケジュールの後、夜に行われた國分学校長主催レセプションでは各留学生の同期生代表者等も招待され、思ひ出話に花を咲かせておりました。参加した留学生からは「是非、今後も定例的に行って頂きたい。」とのご意見も頂きました。この様な企画は、予算の関係上、毎年の開催は困難と思いますが、同窓会としても今後もこの企画を支援していきたいと考えておりますし、これを機会に同窓会海外支部との関係強化も図っていききたいと考えております。

次に、同窓会の近況について申し上げます。同窓会は第1期生を中心に昭和36年（1961年）1月21日に設立され、今年で60年目を迎えております。これまでの諸先輩、各期生会役員、地域支部等々の方々のご努力により大変素晴らしい会に育ってきております。防衛大学校卒業生のうち既に自衛隊を退官されたOB数が現役の数を越え、同窓会会員総数は2万5千人を超える大所帯になってきております。この様な中、今年の代議員会では、第1期生会会長の深山様から、「第1期生会として全国的、組織的活動を終了する。」旨のご発言があり、第1期生会と防大同窓会との組織的な関わりを終了いたしております。同窓会も一つの節目を迎えていることを実感している次第です。同窓会に新たに加入する期生会がある一方で、第1期生会のように同期生会としての一部の活動は継続するものの同窓会との関わりを終了するという期生会があり、ある意味において同窓会組織として一巡した状態、即ち定常状態になったとも考えられる訳です。その意味で今後、我々はこの同窓会を如何に成熟させていくか、より充実させていくかの大きな転換期に直面していると考えております。

この様な観点から、今年の代議員会では同窓会の会則の見直しを提案したところです。会則変更の第一点目は、これまで「本会は、会員相互の親睦、母校の発展及び云々」としていた部分を「本会は、母校の充実・発展、会員相互の親睦・交流及び云々」とし、会の趣旨を母校の充実・発展を優先すべきとの提案です。また、第二点目は、かねてからご提案がありました「寄付に関する手続き」の件です。これまでは「収入の一部としての寄付」規定はありましたが、「手続き規定」がありませんでしたので、この手続きを明確にした会則変更です。この二つの会則改正は今後の同窓会の在り方、充実すべき方向を示すものと考えております。その他の審議事項は、例年どおりの「平成30年度同窓会事業報告・同会計決算報告・会計監査報告」と「令和2年度同窓会事業計画・同事業予算」です。

今年は残念ながら一堂に会し審議することが出来ませんでした。我々同窓会役員一同、今年度も母校の更なる充実・発展の為、そして同窓会の更なる発展の為、尽力する所存です。何卒、会員の方々の同窓会活動に対しますご理解・ご支援をお願い申し上げますとともに、我々同窓会役員に対します叱咤激励を賜りますよう重ねてお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

防衛大学校同窓会長 岩崎 茂

■会長ルーム・活動録

◇令和元年度第3、4学年部隊実習激励

2019. 8. 5

岩崎同窓会会長は、令和元年7月8日（月）から9日（火）の2日間、青森県内の3自衛隊で部隊実習中の陸海空要員を激励しました。

7月8日（月）に、海上自衛隊八戸基地で部隊実習中の第3学年海上要員、及び陸上自衛隊青森駐屯地で部隊実習中の第3学年陸上要員を、同月9日（火）に航空自衛隊車力分屯基地で部隊実習中の第4学年航空要員を激励しました。

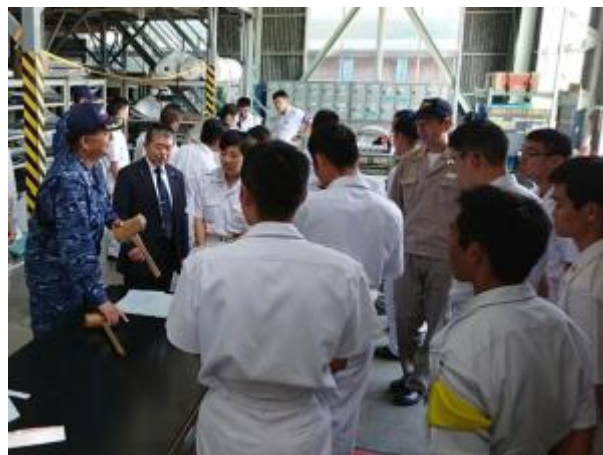
【海上自衛隊八戸基地での激励】

海上自衛隊八戸基地では、第3学年海上要員34名に対して激励を実施しました。

会長は、第2航空群司令 瀬戸海将補と懇談の後、航空集団第2航空修理隊で実習中の学生を激励するため、基地内の整備格納庫に移動しました。第2航空修理隊は、大型固定翼機の定期特別修理、臨時修理などを任務とする部隊であり、34名の学生が数個班に分かれてP-3C等の実機を前にして航空機修理体系、修理技術などについて隊員から教育と実技指導を受けていました。



指揮官表敬、懇談



実習視察

実習終了後、会長から学生に対し講話を実施しました。

会長は、自らの経験に基づき、指揮官として肝要な資質である「知性」「説得力」「体力」「セルフコントロール」「強い意志」について具体的な事例を挙げながら紹介し、さらに国際的感覚を身に着けることなどを学生に推奨しました。



学生に対する講話



真剣に聞き入る学生

【陸上自衛隊青森駐屯地での激励】

陸上自衛隊青森駐屯地では、第3学年陸上要員8名に対して激励を実施しました。

会長は、第9師団長 岩村陸将と懇談の後、第5普通科連隊で訓練中の学生を激励するため、駐屯地内の降下訓練塔に移動しました。

第5普通科連隊では、8名の学生がヘリコプターからのリペリングを想定した実技訓練を受けていました。そして、会長及び第9師団長に対して、訓練で習得した15メートルの降下訓練塔からのリペリングを披露して頂きました。



学生による降下訓練の様子



師団長から実習状況の説明受け

学生は、隊員から学んだ手順をひとつひとつ呼称しながら降下の準備を進めた後、大きな声で「準備よし」との最終報告を実施し、2名同時にみごとな降下を実施しました。

実習終了後、会長から学生に対し講話を実施しました。

会長は、少人数での講話であったことから学生一人一人に対して質問と回答をしながら、自衛官及び指揮官に大切な資質について紹介をしました。

夕刻、実習支援部隊の他、駐屯地所在の同窓生及び青森地方協力本部長 木村 1 等空佐もご参加頂き懇談会を行いました。途中、学生一人一人から自己紹介と今後の抱負が発表され将来の幹部自衛官に盛大な拍手が送られました。

【航空自衛隊車力分屯基地での激励】

航空自衛隊車力分屯基地では、第4学年航空要員37名に対して激励を実施しました。

会長は、第21高射隊長 柏本2等空佐と懇談の後、第21、22高射隊で実習中の学生を激励するため、基地内のペトリオット器材展示場に移動しました。37名の学生が数個班に分かれてペトリオット器材の実習を受けていました。

学生は、隊員からの説明に熱心に耳を傾けながら、ペトリオット部隊の任務、器材の機能などについて理解を深めていました。



実習視察



実習状況の説明受け

実習終了後、会長から学生に対し講話を実施しました。

会長は、航空自衛隊のパイロットであった経験などを踏まえながら、第4学年として残りの学生生活において大事にしてもらいたいことについて紹介をしました。その後、第21、第22高射隊長、代表学生などと昼食を共にしながら防衛大学校での学生生活や同窓会の活動などについて意見交換を実施しました。



学生に対する講話



代表学生との意見交換会

最後に、第2航空群司令 瀬戸海将補、第9師団長 岩村陸将、第21高射隊長 柏本2等空佐をはじめ、ご支援を頂きました各基地及び駐屯地所属の隊員各位、部隊実習を計画担当されている防衛大学校訓練課の方々に心より感謝申し上げます。

(28期陸 河本 宏章、28期海 畠野 俊一、28期空 相原 武士記)

◇日豪士官候補生ラグビーマッチ激励

2020. 1. 14

岩崎会長は、令和元年10月18日（金）、防衛大学校ラグビー場で開催された「日豪士官候補生ラグビーマッチ（Rugby Union Match）第2戦」を観戦し、出場した母校ラグビー部を応援するとともに、試合後、メルキューレ・ホテル横須賀で行われたフェアウエル・パーティに参加して、日豪両国の士官学校ラグビー選手の健闘を称えました。

交流戦は、防衛大学校と豪州国防軍士官学校（ADFA）のラグビー部間で行われました。試合は、体格の差をものとしめない固いスクラムで耐えながら相手スクラムを押し返す防大チームが、21対10とリードして前半を終了しました。後半、パス主体の攻撃に切り替えたADFAチームに連続4トライを決められ逆転を許しました。その後、防大チームは後半終了間際まで果敢に攻めるも結果は35対38で終了、防大の惜敗、ADFAの勝利でノーサイドとなりました。

本交流戦は2試合が行われ、10月14日（月）に同会場で行われた第1戦も、勝敗の行方が最後まで見えないシーソーゲームの熱戦が繰り広げられ、こちらは24対24の引き分けという結果でした。

この士官候補生ラグビーマッチとなった日豪交流事業は、防衛大学校が、相互理解と信頼醸成を目的とする学生間防衛交流事業として、RWC（ラグビー・ワールド・カップ）に並行して開催された国際軍人ラグビー競技会（英仏豪等10カ国軍が参加）に併せて企画したもので、これに豪州国防軍士官学校が賛同し来日したことから実現したものです。

また、第2戦に併せて自衛隊体育学校女子ラグビー部と豪州国防軍士官学校ラグビー部（女子）のエキシビジョンマッチ（女子7人制ラグビー試合）も行われ、体育学校チームの圧勝でしたが、試合中、ラグビー場を取り巻くように応援していた多くの防大生からは、豪州国防軍女子士官候補生の選手に惜しめない声援と拍手が送られていました。



試合観戦中の國分学校長と岩崎会長（手前）



オープニングドリル

★国家斉唱する日豪士官学校ラグビー部の選手ら



豪州国防軍士官学校チーム



防衛大学校チーム

★激闘！日豪士官候補生ラグビーマッチ（第2戦）



ラインアウトの攻防



激突！スクラム勝負（耐える防大チーム）

★ノーサイド



ベストを尽くし笑顔の選手ら
（国分学校長を囲んで）



第2戦の結果（惜敗、防大チーム健闘！）

★エキシビジョンマッチ（女子7人制ラグビー試合）



豪州国防軍士官学校ラグビー部（女子）の選手



自衛隊体育学校女子ラグビー部の選手

（手前の男性は、本交流戦を企画担当した防大ラグビー部顧問）

★フェアウェル・パーティで両校チームの健闘を讃える



交流戦での両チームの健闘を讃える岩崎会長と
優秀選手



両校ラグビー部の選手ら



豪州国防軍士官学校から防衛大学校へ送られ
た記念品

（29期陸 平栗浩一 記）

◇防衛大学校令和元年度開校記念祭等参加

2020. 1. 18

令和元年11月16日（土）～17日（日）の2日間、岩崎会長は、防衛大学校で実施された第67回開校記念祭等の行事に参加しました。

16日に人文科学館南側顕彰碑前において行われた顕彰碑献花式には、同窓各期代表も参列し、105柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。本年度は新たに2名の顕彰者が祀られ、厳粛に式が挙行される中、國分学校長に引き続き顕彰の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと御遺族のご健勝を祈念しました。

また、本顕彰碑献花式に先立ち本館会議室において國分学校長をはじめ各幕僚長代理などの来賓を迎え同窓会会食を行いました。

17日は、訓練展示・記念式典・観閲式、祝賀会食に参列するとともに、第43期ホーム・ビジット・デイ（HVD）に國分学校長とともに参加しました。

記念式典・観閲式では、学生による威風堂々たる観閲行進が行われました。この際、卒業生を中心とした飛行部隊による祝賀飛行が式典に花を添えました。

祝賀会食では最後に挨拶に立った岩崎会長が、在校生の勇躍たる活躍の一端を紹介するとともに防衛大学校の発展を祈念して万歳三唱を行いました。



同窓会会食



顕彰碑献花式



観閲式



開校記念式典



祝賀会食



4 3 HVDで國分学校長と共に

(2 9 期陸 平栗 浩一 記)

◇防衛大学校本科卒業留学生交流会レセプション等参加

2020. 1. 18

令和元年11月28日（木）～29日（金）の2日間、岩崎会長は、総理公邸及び防衛大学校等で実施された「防衛大学校本科卒業留学生交流会レセプション」等に参加しました。

本事業は防衛協力・国際交流の一助として今年初めて開催されたもので今回、12か国約50名の卒業留学生（現役軍人）が招待されました。

28日（木）に総理公邸で行われた総理大臣主催レセプションでは、総理挨拶に続き参加各国卒業留学生代表が日本語で挨拶し、安倍総理と握手を交わしました。

29日（金）に防衛大学校（小原台）で行われた歓迎セレモニー、歓迎会食、学校施設・校友会見学等に引き続いて横須賀市内で実施された防衛大学校長主催レセプションでは、同窓会役員・事務局員も参加したほか、来日した卒業留学生の日本人同期生代表らが数多く集いました。レセプションの最後には、参加者全員が肩を組んで逍遙歌を合唱した後、岩崎会長の挨拶をもって交流会は盛会のうちに大団円となりました。

（参加国：タイ・シンガポール・マレーシア・フィリピン・インドネシア・モンゴル・ベトナム・大韓民国・カンボジア・東ティモール・ラオス・ミャンマー）

★29日 防衛大学校記念講堂における歓迎セレモニー



國分学校長からの歓迎の挨拶

★ 29日 防衛大学校長主催のレセプション



一人ずつ流暢な日本語で挨拶する来日各国卒業
留学生代表



追遥歌の合唱



歓迎の挨拶の後、来日各国卒業留学生代表に
記念品を贈呈



國分学校長と共に各国の卒業留学生及び
在校留学生との記念撮影

(29期陸 平栗 浩一 記)

■防衛大学校関連

◇新幹事に聞く

2020. 2. 4

「世界一の士官候補生学校を目指して－当面の課題」

防衛大学校幹事

陸将 原田 智総

(31期・陸上)



昨年12月20日付で幹事を拝命し、防衛大学校卒業以来、33年振りに小原台の地に立ちました。学校本部を始めとする新しい施設や多様な学群編成など新しい防大を感じつつ、規律正しい生活や校友会・勉学に励む学生の姿に、私の在学時と変わることのない防大の伝統を実感しています。また、幹部任官以来、部隊・幕僚組織に身を置いてきましたので、学校運営や学生育成に係る業務の進め方に戸惑うこともあります。国分良成学校長が掲げられている「世界一の士官候補生学校」を目指し、微力ながら努力する所存ですので、諸先輩方のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

さて防大の近況については、昨年の小原台だより Vol.26 (2019.07.11) にて納富前幹事が寄稿されていますので、今回は「世界一の士官候補生学校」を目指す上での課題について、私なりの考えをご紹介します。現在、創立100周年に向けて、防大の未来構想を練る「更なる高みプロジェクト」が学内で進行中です。内容的には長期的な視点で非常に幅広く、多様な方策が議論されていますので、本稿では当面解決していかなければならない課題に焦点を当てたいと思います。

「環境は人を作る」と言われています。榎初代学校長が「僧房、修道院が好んで山頂や山中に（中略）建立されるのと軌を一にする」と表現されていますが、小原台が防大の設置場所として選定されたのも、「学生の修業に専念するに最良の地」であったからに他なりません。そのような観点から「世界一の士官候補生学校」として具備すべき要件の一つ目は「一等の環境」を整えることだと考えています。現在の防大の環境を見るに、確かに多くの施設は新しくなっていますが、建物総数153棟中、約6割の90棟が平成元年以前に建築されたものです。研究棟については本年度に旧理工学館2棟を合棟した新理工学館1棟の建替が終了し、令和11年度までに全ての理工学館・防衛学館の建替が計画されています。学生舎は平成16年に第3大隊、18年に第4大隊、21年に第2大隊、24年に第1大隊の建替が終了しました。外見上は美しく見えますが、第3大隊学生舎は15年が経過し、小原台の気候の厳しさもあり、各所にシビアな不具合が生じています。学生舎内の備品も老朽化が進んでおり、中には使用に耐えないものも散見されます。また、学生舎1棟は本

科学生 460 名（4 棟で 1840 名）を基本として設計されていますが、予算定員の増加（460 名から 480 名）や留学生の受け入れ（本科 93 名）などにより現収容人員数は 1929 名であり、収容能力を 100 名程度オーバーしています。加えて本科学生中 239 名の女子学生は、男子学生と同一フロアで起居しています。この現状は将来の国防を担う士官候補生を育成するに十分な環境を提供できているとは言えず、昨年 9 月に河野防衛大臣にもご確認頂いております。令和 2 年度には学生舎改修、備品更新のための予算が計上されていますが、第 5 大隊の復活による収容能力の拡充を含め、学生に「一等の環境」を整えるため不断の努力の必要性を痛感しています。

二つ目は、防大の本務である「一等の教育訓練」を提供することです。現在の防大は人文・社会学 3 個学科、理工学 11 個学科から構成されています。加えて平成 24 年度から人社系・理工系をまたがる形で、所属学科以外の他の領域も効果的に学ばせ、幅広い視点からの総合的な問題解決能力を身に付けさせることを目的として、「危機管理」「安全科学」「生命科学」「国際交流」の 4 プログラムが設定されており、非常に充実した教育課程となっています。しかしこれらは「小原台の中」でのことであり、将来の幹部自衛官として広い見識やより高度の知識を得るためには、外に出て学ぶことも重要です。教官の推薦や本人の意志に基づいて、他大学や研究機関における受講が可能なプログラムの設定、そのための学生に対する時間的余裕の付与や他大学等と相互に学生を派遣できるよう連携を図る必要があります。特に他大学等との連携にあたっては、防大教育に関する部外への情報発信が不可欠であり、文部科学省が厳正な審査を経て採択する科学研究費助成事業（競争的研究資金の獲得）への更なる参画や、防衛研究所、防衛装備庁及び各自衛隊研究機関との共同等による安全保障政策提言や装備開発研究が必要です。これらの施策を通じて、学生に提供する教育レベルが向上するとともに、副次的に防大を目指す学生や教職員・研究者に防大の魅力を訴えることができるものと思います。

また国際化への対応も必要です。防大では 9 カ国 93 名（本科入校前の日本語研修生を加えれば 10 カ国 119 名）の本科留学生及び 9 カ国から 38 名の短期研修を受け入れていきます。防大からも 13 カ国の士官候補生学校に 57 名の学生を長期・短期派遣しています。加えて国際士官候補生会議（約 20 カ国 30 名を招聘）、インド・パシフィックウィーク（3 カ国 22 名を招聘）の多国間交流プログラムを実施しており、学生に国際化の素地を付与するとともに、将来につながる安全保障上の相互理解と信頼醸成に寄与しています。このような取り組みは今後も継続・拡大するものと予想される一方で、最近の本科学生の TOEIC 平均は 500 点前後、400 点未満が約 480 名存在しており、語学力の修得は道半ばです。引き続き国内における在日米軍を含めた各国・多国間の交流プログラムを通じて学生のインセンティブを高め、語学教育努力を継続することが重要です。

教務に加えて学生には 4 年間で約 1000 時間の訓練が課されており、基本的な各自衛隊の戦闘戦技訓練や部隊研修が行われています。自衛隊においては装備の高度化、任務の多様化が進んでいる一方で、防大で行われているこれらの訓練は、過去のものからほとんど変化していないのが実情です。学生の任官辞退理由の一つに部隊における勤務への不安や理解不十分があることから、部隊における実習・研修をインターンとして活用し、部隊活動の実情や高度かつバラエティーに富む業務内容への理解促進を図るとともに、機会を

捉えて災害派遣などの実部隊運用を体験させることが必要と考えています。

防大における教育訓練には校友会活動による心身の練磨、学生舎生活を通じた自主自律の精神や規律心、リーダーシップとフォロワーシップの涵養なども含まれます。校友会に関しては平日の活動の公務化は認められたものの、休日の活動、部外大会参加などは未だに認められておらず、学生が憂いなく活動できる制度を整える必要があります。また学生舎生活においても、コンプライアンスの観点から指導官の関与が増加しつつあります。確かに学生を管理することも必要ですが、彼ら・彼女らが自ら考えて学生隊を運営する余地を増やすことが、学生舎生活の目的を達成する上で重要です。

これらの課題は数週間の防大勤務で私が感じたことですので、これからも多くのチャレンジがあると思います。将来の我が国防衛を担う世界一の幹部候補生を育成すべく、執念をもって職務に取り組む所存です。諸先輩方には校友会行事や開校祭などの機会を捉えて防大の現状を見て頂き、また学生達を激励下されば幸甚です。

◇防衛大学校第67期期生会設立総会参加

2020. 3. 18

第67期期生会として、総員503名（うち女子53名、留学生22名）の中から、期生会長に第422小隊堀越智也学生が事前に選出され、2020年3月12日（木）、防衛大学校において、設立総会が開かれました。

新型コロナウイルスの感染予防のため、学生全員がマスクを着用して、席を離して着席する態勢の中、同窓会からは岩田清文副会長が出席し、祝辞を述べるとともに、期生会に対する助成金を手渡しました。

総会に先立ち、岩田副会長は、國分良成学校長、辻秀夫副校長、香月智副校長、原田智総幹事、金刺基幸訓練部長及び小原台事務局長中澤空将補と懇談しました。懇談は、学生の近況から国際化する自衛隊の中、英会話能力向上がますます重要となってきたが、最も大事なことは防大生のあるべき姿を求めつつ、学生生活や勉学を通じて、ものの本質を見極める力を身に着けることであろうと学生時代の思い出話など広範多岐にわたりました。

設立総会は記念講堂において開催され、堀越期生会長以下9名の役員紹介に引き続き、期生会長の所信表明が行われました。

期生会長は、「この小原台1年で幹部自衛官の資質の涵養のため、必死に力を合わせ、頑張っ様々なことを乗り越えてきました。そして、次のステージに進もうとしています。ヘルマンヘッセ『鳥は卵の中から抜け出ようと戦う。』を引用して、学年の階段を上るにつれて、責任を負います。卒業後も新しい世界と出会います。期生会は、その新しい世界への旅立ちを支援するため、他の大学生より遥かに絆の強い同期500人への自助公助のための努力を惜しまない組織にしたい。」と抱負を述べ、最後に「幾多の伝統を糧に67期の誇りを胸に精一杯邁進していく。」と決意表明をしました。

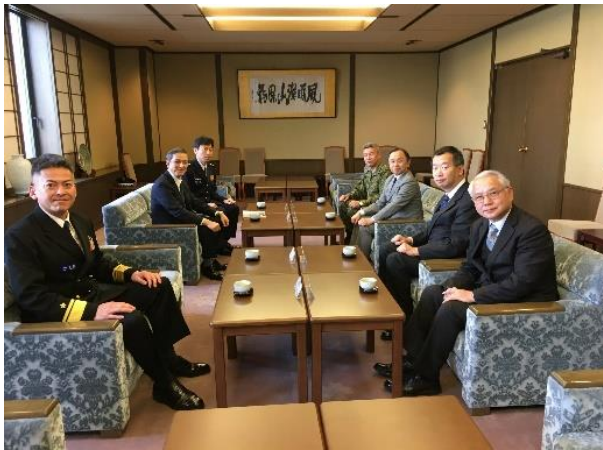
國分学校長の祝辞では、「防大生が大好きです。こうした学生は他にいないのです。その学生を教育出来ることを誇りに思っています。私の知人の同期や先輩には、大企業に勤めている人がいますが、彼らに、もし、生まれ変わるとしたら、同じ会社を選択するかという質問を投げかけると大抵は口を濁します。それは、世間の移り変わりで会社名が変わったり、合併したり、会社がなくなったりと出世したかは別として、仕事に、そして人生に意義を感じ得たか疑問を感じている人が多いからでしょう。そうした中で、この会社で良かったという人もいます。それは、入社して最初の一年間、寮生活をして、お互いをよく知って仲間となったという人です。だから、今でも仲良く旅行をしているそうです。しかし、防衛大学校は4年間です。絆が横に広がり厚い絆になります。同期だからこそ、同期がどんな生き方をしたかも分かります。だからこそ、学生としての誇りと矜持をもって、同期の団結を育んでもらいたい。」と要望されました。更に、「今回は全員がマスクをしています。これも歴史に残ります。異常事態の中での設立総会です。記憶に留めてください。不測事態に如何に対応していくかという中枢を担うことも我々の務めである。」と締めくくりました。

引き続く、岩田副会長の祝辞では、「2万数千人の同窓会の仲間として、歓迎する。」と

述べ、「人は人によって人となる。人と人は支え合って、絆をもって、生きていく。そして、学生時代から卒業後も楽しい時、悲しい時、苦しい時、何でも言い合える。認め合える。そうした『おい、おまえの仲』、気の許せる同期という関係は何事にも替えられない有難いものです。卒業後20年の記念パーティー、43年後のホームカミングデーなど節目行事を迎えつつ、離合集散を繰り返しながら、最も長く強い同期の絆を育んでほしい。」と強調しました。「実は、昨年暮れに、第1期生の期生会長から、高齢になってしまったため、期生会としての組織的な活動を終了したいと相談を受けました。第1期生の皆さんは、同期として、人生のほとんど70年という長く太い絆、つながりを築いてきたことになります。皆さんもどうか、どこの期にも負けないように、同期とともに一人一人が豊かな人生を送れるよう、期生会が会長を核心として発展することを期待しています。」と祝辞を述べました。

式の締めくくりとして、学生歌を斉唱し、設立総会を終了しました。

新型コロナウイルスの感染予防のため、関係者全員がマスクを着用する状況でしたので、会食は学校関係者との会食となりましたが、和やかな雰囲気、今回の母校支援を終了することが出来ました。



懇 談



役員紹介



期生会長挨拶



学校長祝辞



設立総会の状況

(29期陸 坂間 輝男 記)

■同窓生は今

◇第63期生に聞く（その1）

2019. 12. 7

「幹部候補生学校の生活について」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第3候補生隊第2区隊

一般幹部候補生 陸曹長 沖 惣一郎



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第100期一般幹部候補生（防大、一般大学等出身者）課程に入校中の防衛大学校本科第63期卒業生、機能材料工学科、合気道部、沖惣一郎です。

私は、3月29日に期待と不安を感じながら幹部候補生学校（以下、OCSと言う。）に着校し、半年が経過しました。防衛大学校とは教育目的が異なるOCSでの修学は当然のことながら防衛大学校と異なる点が多くあります。顕著な例としてOCSでは上級生下級生という上下関係がありません。同期同士が国防という任務の中核をなす人材となるため、先頭に立つ自らの姿を思い描き、切磋琢磨し主体的に修学する日々を過ごしています。

OCSの教育目的は幹部としての資質の涵養及び初級幹部としての必要な基礎的知識・技能の修得です。つまり小部隊指揮官に最低限必要な事項を学びます。具体的には実員指揮に重きをおいた戦闘戦技訓練、戦術や戦史といった幹部に必要な識能教育、高良山登山走、藤山武装障害走等の体育訓練がそれにあたります。こうした教育訓練に励む中で防衛大学校の重要性・関連性に気づき、自らの苦い経験を後輩には味わって欲しくないと思い筆をとりました。伝えたいことは「同期の絆」、「主体的な行動」及び「理想の指揮官像」の3点です。3点についてOCSでの学び、防大時代にやっておけば良かったことについて話をします。

1点目は「同期の絆」です。自衛官は部隊活動により任務を達成します。従って横の人間は生死を共にする運命共同体です。とりわけ同期は上級生下級生という軋轢なく接することができる「最も優しく、最も厳しい」存在です。OCSでは総合訓練等の心身に大きな負荷をかける訓練が多くあります。これらに対し、区隊で目標を掲げ、厳しい練成を行う時、自身を支えてくれる存在が同期です。私は個人でできることの少なさと同期との連携・協力が任務達成のためには必要不可欠である事に気が付きました。衝突することもあります。尊敬できる同期も多くおり、自分の至らなさや実力不足を感じ、自分を見つめなおせます。自らの視野を拡大させ、個性を磨く事にもなります。また、OCSでも同期が間違っていることがあります。その場合は同期でも教えなければなりません。それが区隊のため、同期のためになります。易きに流れるのではなく、正しいと思う行動をとって

ください。しかし、言い方によって伝わり方は異なります。ここで防大時代での対人関係力が活かれます。

校友会への取り組み方もこれに似ているでしょう。校友会の同期は防大生の最も長い時間を共有できる存在です。その同期に関心を持ってください。同期は自分が想像している以上に尊敬できる存在です。同期を試金石として、自分をしっかり磨いてください。OCSでは防衛大学校での同期に加え、一般大学や陸士出身の候補生と共に教育を受けます。これらの同期は、私たちが知らない経験を多くしており、視点も大きく異なり、興味深く、とても良い刺激を与えてくれます。

2点目は「主体的な行動」です。自ら学ばなくては何も得ることは出来ません。防大で出来なかったことがOCSで急にできることもないでしょう。防衛大学校を卒業してOCSに入校し、初めは戸惑うこともありましたが自助努力なしで出来るようになったことはありません。つまり積極進取の姿勢が大切と言えます。

OCSでは指揮の要訣を実践します。上手くいかない時もありますが、失敗は同期が補佐してくれますし、失敗してもその原因を考え、次に反映すれば、失敗は意味のあるものになっていきます。

これは防衛大学校における学科においても同様で、世の中は変化することから、学び続けなければなりません。そのための素地を防衛大学校で学んでいると考えてください。ややもすれば時間に追われ、受け身に陥りがちになります。そのような時こそ主体的に修学しなければなりません。

3点目は「理想の指揮官像」です。尊敬する人の有無が人生を大きく変えます。防大時代は様々な指導官・教官や同期、上下級生と出会いがあります。教育をただこなすだけでは指揮官に必要な資質が身につくわけではありません。なれるかどうかではなく、どんな指揮官になるべきかを具体的に考え行動し、試行錯誤しながら日々を過し行動した人とそうでない人では大きな差になるでしょう。

学生舎生活でも同じことが言えます。尊敬できる人は身近にいるため、参考にしながら、自分がどうあるべきなのか、早いうちから考えてみてください。

OCSや防大は幹部自衛官になるために必要な資質・識能を涵養・修得できる環境が整っています。活かすかどうかは自分次第です。防衛大学校で、今のうちから環境を利用し自ら考え行動する習慣を付けてください。

最後に防大時代、様々な事を教えて頂いた指導教官や学科教官等の皆様ありがとうございました。教えを胸に国防を担う人材となる事を誓い結びとします。

◇第63期生に聞く（その2）

2019. 12. 7

「幹部候補生学校で何をするのか」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第4候補生隊第5区隊

一般幹部候補生 陸曹長 三谷 晃平



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第100期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程に入校中の防衛大学校本科第63期卒業生、三谷晃平候補生です。

私達63期が、幹部候補生学校に入校して既に半年が過ぎようとしています。入校前、不安と期待が入り混じった心情で、慣れない生活に戸惑うことも多々ありましたが、課業や課外練成において、心身ともに成長していることを日々実感しています。幹部候補生学校では、区隊長を中心とした指導部及び候補生隊職員の下、日常起居、訓練及び体力練成を通じて、幹部自衛官に必要な資質を涵養することができます。また、戦術をはじめとして、戦史、英語等を、各教官から学ぶことで、初級幹部に必要な識能を養うこともできます。時には、心身ともに疲弊することもあります。目の前の目標を1つ1つ乗り越えることで、同期と良好な関係を築き、日々充実した生活を過ごしています。そこで、本投稿では、このような生活の中で一体何を目標にすべきか、何を実行すべきなのかに焦点を絞り述べさせていただきます。1点目は、「理想の幹部像を見つけ、追い求める」、2点目は、「自ら厳しい環境に飛び込む」、最後に「同期を大切にする」の3点です。

まず、1点目の「理想の幹部像を見つけ、追い求める」についてです。幹部候補生学校では、多くの先輩幹部の方々と交流する機会があるとともに、身近には区隊指導部に模範とすべき方々がいます。将来どのような幹部になりたいのか、このビジョンが見えているのといないのとでは訓練、体力練成及び座学においても一度で得ることのできる情報及び成果が違います。まず目標を立て、努力する方向を決定してみてください。目標を見つけ、努力することは幹部候補生学校での生活をより有意義にする以外にも、今後の自衛官生活において必ず役立つと私は考えています。

次に、2点目の「自ら厳しい環境に飛び込む」についてです。この言葉は多くの方が耳にしたことがあると思います。幹部候補生学校では、半週交代の勤務（小隊長、小隊陸曹、学習係）をはじめとして、同期生会、教務、体育、環境美化等の係勤務を実施します。そして、これらの勤務以外にも、数多くの「やるべき事」が存在します。

そんな多忙な日々の中で、多くの候補生が自分の時間の充実を優先し、他人任せに考えてしまう時があります。むしろその連続かもしれません。また高良山登山走や藤山武装障害走に向けた練成の中で、自分の甘えた心に負けて妥協しそうになることも多々あります。しかし、そういった状況があるからこそもう一步厳しい環境に自らの足で飛び込んでみて

ください。失敗したとしても、結果が出なかったとしても、そこで得た経験は必ず将来に繋がります。より厳しい選択を自らのためにしてみてください。

最後は、「同期を大切にする」についてです。こんなことは当たり前だと思うかもしれませんが。しかし、幹部候補生学校は常に自分に余裕が持てるような甘い環境ではありません。時には自らのことで精一杯になり、同期に対して強く当たってしまうこともあります。私自身もそのような経験があります。しかし、どのようなきつい場面でも最後に頼りになり、そして助けてくれるのは同期です。過酷な状況にあるほど、同期を支援することは簡単ではありません。しかし半年後には部下を持つ私達にとって、この能力は必須なはずです。同期を大切にする、幹部候補生学校はこの言葉の重要性を知る良い環境でもあります。

「理想の幹部像を見つけ、追い求める」、「自ら厳しい環境に飛び込む」、「同期を大切にする」この3点について述べさせていただきました。幹部候補生学校ではこの3点全てを実行できる環境が整っています。ややもすれば、周りの候補生が消極的な発言や、怠慢な態度をとり、自分も流されそうになるかもしれません。そんな時こそ「自分が何のために幹部候補生学校にいるのか」「何をして、何を学ぶべきなのか」を考えてみてください。私の投稿が少しでも後輩の役に立てれば幸いです。

◇第63期生に聞く（その3）

2019. 12. 7

「改革意識 "後輩諸君に伝えたいこと"」

海上自衛隊幹部候補生学校

第1学生隊第2分隊

一般幹部候補生 海曹長 森 春太郎



防衛大学校を卒業し、期待に胸を膨らませながら、海上自衛隊幹部候補生学校（以下「候校」という。）に入校してから早くも、4か月という月日が経過しました。候校での生活は防衛大学校（以下「防大」という。）と違い、伝統的な海上自衛隊の風習や躰事項を取り入れているため、海上自衛官として勤務する実感をより身近に感じています。今回、候校第70期一般幹部候補生課程の防大第63期生を代表して、「小原台だより」に寄稿する機会を頂いたため、「価値観の共有」「伝統教育」「防大の後輩諸君へのメッセージ」について述べたいと思います。

はじめに、「価値観の共有」について述べます。候校では、防大卒、一般大卒の学生や、部隊勤務経験がある部内出身者の学生等、様々な経歴を持つ学生が同じ環境下で、共に学び同じ部屋で生活しています。そのため意見交換の機会は日常的に多く存在します。一般大卒の学生の意見は、我々の防大生活で身に付いた、やや自衛隊寄りな思考に刺激を与えてくれるとともに、新たな価値観を生み出させてくれます。それは一般大卒の学生も同じであり、自衛隊を知らない彼等にとって、防大卒の学生の価値観は新鮮であり、候校で生活する上で非常に参考になるものです。意見交換や日常生活をとおして「価値観の共有」は深まり、お互いが成長できていると実感しています。今後とも互いに協力し、切磋琢磨していく所存です。

次に、候校で行われている「伝統教育」について述べます。候校では、前身である海軍兵学校時代から伝統的に、様々な困難を乗り越える教育を実施しており、幹部自衛官を目指す我々には、日常生活の中で多くの課題や状況が付与されます。幹部海上自衛官の勤務は幹部陸上・航空自衛官と比較して海外を含む任務活動地域が多く、1回の任務における行動日数が長いという特徴があります。加えて、世界第6位の排他的経済水域を有する自国の海上防衛に従事することが求められることから、我々にはタフな精神力と旺盛な体力が求められています。

候校で4か月間経過した現在、候校での教育は、我々に求められるタフな精神力と旺盛な体力の基盤構築に寄与していると感じています。加えて、幹部自衛官となる我々は、限られた環境や条件の中で現状を迅速に分析し、最善の選択をすることが求められます。この能力は突発的に身に付くものではなく、日常的な訓練により習得可能な能力、いわば、個人の経験値を表していると考えます。

ただし、今後の勤務においては自身の予測しない事態が生起することが考えられます。そういった不測の事態に対して自分の経験値が多いほど、的確な判断を下すことが可能になると思います。私は今後とも、候校の教育を通じて最善の選択をする訓練を積み、指揮官に求められるタフな精神力と旺盛な体力の基盤を構築し、指揮官に求められる人格を形成していくことを目標としています。

最後に、防大の後輩諸君へ伝えたいことは、「改革意識」を持って防大での生活を過ごすということです。ここで「改革意識」とは、学生個人における意識と、組織における意識の2つと位置づけます。組織における指揮官が現状維持という選択をすることは、それ以上の成長は望めず、組織の衰退に直接結び付きます。また、指揮官には、組織の現状を的確に分析し、独自の視点から捉える能力も求められます。

防大での4年間は、将来幹部自衛官となる者としての人格形成や資質の涵養のため、校友会・教育訓練・勉学の3本柱に全力で取り組むことが求められていると思います。しかし、防大の生活をただ漫然と生活するだけでは、幹部自衛官としての人格形成や資質を涵養するには不十分です。私自身、防大において「改革意識」を持って生活することをあまり実践できておらず、現在になって防大時代に「改革意識」を持って生活することを意識していたならば、より有意義な時間を過ごすことができたかと振り返ります。

ここで、防大在学期間において、私が「改革意識」を持って取り組んだ具体例を紹介したいと思います。私は、防大4学年時に1大隊学生長として勤務しました。当時の1大隊の現状は、自分の大隊に対する帰属意識があまりなく、競技会での成績も決して良いと言えるものではありませんでした。そのような雰囲気が日常生活にも影響し、学生の服務態度について指導官から意見が挙がることも多々ありました。

そこで私は、組織に対する帰属意識が弱い部分に原因があると捉えたため、対策として「1大隊向上委員会」という組織を設置しました。「1大隊向上委員会」とは、競技会とは別に1大隊特有の行事を計画、実施、評価することにより、1大隊の学生に帰属意識を芽生えさせるとともに、学生の発案によって実践できることが多く存在することを学生に伝えるという目的で設置しました。

具体的な活動としましては、学科の教官の推薦映画鑑賞会の実施や本館勤務の方々や自衛官との意見交換会等、学生に対して新たな視点での行事を取り入れました。結果、1大隊の多くの学生が自発的に意見を述べる環境の形成に寄与し、感覚的な判断ではありますが、学生の帰属意識も以前よりは強まったと感じました。

変革には多大な勇気と労力を要します。そして、自己の意見を持って行動に移した経験が大切であり、その機会が防大にはたくさんあります。自分1人で「改革意識」を持ち、行動することも良いとは思いますが、防大には多くの頼れる同期がいます。自身が考える「改革意識」について同期と共有するとともに、意見交換を実施する等の時間を持つことも貴重な機会になると思います。

私たち63期一同は一足先に部隊で勤務し、日本の海上防衛に従事することとなります。今後とも皆さんの活躍を新天地にて楽しみに待ち、我々も日々精進していく次第であります。皆さんと海の上でともに勤務する期待に胸を膨らませ、互いに高め合い、己を磨いていきましょう。

◇第63期生に聞く（その4）

2019. 12. 7

「後輩たちに伝えたいこと」

航空自衛隊幹部候補生学校

第1候補生隊第1区隊

一般幹部候補生 空曹長 進 大和



第64期以下の防衛大学校学生諸君、令和という新しい時代を迎え、それぞれの新しい学年はいかがでしょうか。1学年の皆さんは防衛大学校の生活にはもう慣れたでしょうか。学年が変わらなかった学生は、新しい同期にうまくとけ込めているでしょうか。勉学に訓練に校友会に学生舎生活、さらに各種競技会や開校記念祭の準備などに、日々一生懸命取り組まれていることと思います。

現在、私は、奈良県所在の航空自衛隊幹部候補生学校で、航空自衛隊の幹部自衛官となるための素養の修得に励んでいます。今回、「後輩に伝えたいこと」と題して後輩諸君にメッセージを送る貴重な機会をいただいたので、防衛大学校を卒業して間もない今感じていることを伝えたいと思います。

この文章の作成に当たり、まず自分の防衛大学校時代を振り返りました。すると、それぞれの学年で経験したことや、それに伴う様々な失敗が思い返されます。勉学においては、語学に力を入れていなかったことや専攻以外の読書などの自己研鑽を怠ったことを後悔しています。応用化学科と応用物理学科を間違えて選択したことも思い出されます（1学年は気を付けるように）。

学生舎と校友会では、フォロワーとリーダーのどちらの立場も経験して、そのどちらでも悔いが残る部分があります。特にリーダーとしての経験は、もちろん手を抜いていたわけではありませんが、終わってみて気付くことが多々あります。後輩諸君もいずれ防衛大学校を卒業することになりますが、いざ卒業すると、「もっとあの時こうしていれば」と考えることは多少なりともあります。

しかし、それと同時に、それぞれの立場に求められることや自己の性質について理解を深めることができ、そこから多くの教訓を得ることができました。後輩諸君も、防衛大学校での経験の一つ一つが自己の成長につながり、卒業後の自分を形成していることを感じることができると思います。

この経験から「後輩に伝えたいこと」を考えると、英語学習、読書、体力練成をした方がいい等具体的な話も考えられますが、それらの重要性については防衛大学校生活の中で認識する機会があると思うため、今回は割愛します。校友会の後輩や学生舎運営で関わった後輩、同部屋だった後輩等それぞれに伝えたいことが多くありますが、今回は防衛大学校学生全体に伝えたいことを、全員に共通する学生舎生活の観点から述べます。

学生舎生活や学生間指導に関しては、どの期別もそうなのかもしれませんが、私の4年間は変化の激しいものだったように感じます。その大きな要因は、防衛大学校の悪しき伝統といわれていたものが淘汰されたことにあると考えます。社会ではパワハラ問題が大きく取り上げられ、下級生と上級生が共同生活する防衛大学校においても、その防止や、学生のあるべき姿の追求のため様々な施策や教育が行われました。

この変化によって今の学生舎が形成されていったわけですが、私はこのことについて疑問を抱えていました。それは、なぜ最近になるまで悪しき伝統が残っていたのかということです。学生舎生活は修練の場ではありますが、それには不必要で理不尽かつ危険ともいえる伝統が当然のように残っていました。なぜ現代では社会通念上到底認められないものが、職員の方々に着手されるまで学生の手で変えられなかったのでしょうか。かくいう私も、この時代でなければ、「学生舎とはこういうものだ」と思い悪しき伝統の一部を形成していたかもしれません。

前記のとおり、防衛大学校はどの期別の時代でも変化を続けてきたと考えれば、諸先輩方が変えたものもあり、63期が変えたものもあり、指導官や本館の方々の手により変わった部分もあると思います。その変化はいつでもポジティブなものであったと思いますが、それにより失われるものもあります。

私の4年間でいうと、探せば様々なものがあると思いますが、その中の一つに上級生の学生間指導への熱意が失われたことが挙げられます。学生間指導体制の改善が図られた際に、今まで学生が必要を感じて行ってきた指導までもが無くされた、若しくは指導の実施に手続きが必要になり適時性が失われたことにこの原因があります。

今までの学生間指導の指導者側の自由度が制限されたことにより、理不尽かつ不必要な指導は局限されましたが、同時に活発な指導への意欲が失われたのだと考えます。この失われたもの、私の期別までで生起した不都合等が、今後後輩たちが変えていくべきものの一部になり、防衛大学校はその繰り返しで進化していくのだと思います。

そしてこのことから私が後輩たちに伝えたいことは、「君たちの手で防衛大学校を作り上げてほしい」ということです。これは、過ごしやすさや快適さの追求ではなく、防衛大学校生活における様々な活動について今の状態よりも改善できることを考え、その改善のための方策を模索し、実践してほしいということです。ここまでの学生舎生活の話の中で出た、上の期別から得た課題に取り組むこともその一つですし、既存の規則を改訂することも必要かもしれません。

それに加え、新しいものの導入を考えることも必要だと思います。これは校友会活動においても全く同じことがいえます。おそらく、各長期勤務学生はいずれかには着手していることと思うので、各学生は良きフォロワーとなり、リーダーを支えてください。

最後に、この際に注意してほしい点は、最初から変えることに固執しないことです。まずは学生の手による学生舎や校友会運営の地盤を固め、やるべきことができているか確認してほしいと思います。その地盤の上に、君たちが必要だと思うものを積み重ねていってください。君たちの努力が、さらに次世代の後輩たちの学生舎運営及び校友会運営等における指針となり、防衛大学校で得た知識と経験と仲間たちが、数十年後の自衛隊を動かす原動力となると思います。

私のこの文章が少しでも何かの参考になれば幸いです。共に成長し再会できる日を楽しみにしています。



幹部候補生学校での訓練風景（60km 徒步行進訓練）

◇今人生、男盛り（第25期生）（その1）

2020. 1. 3

「伊豆市長の実戦記」

陸25期 菊地 豊



私は防衛大学校を卒業するとき、人生の3つの目標を設定した。

- ① 国連のPKOに参加すること
- ② （西）ドイツの防衛駐在官になること
- ③ 哲学者エマヌエル・カントの著作を1冊、ドイツ語で読むこと

国際関係論の卒論でドイツを扱ったことが背景にあったのだろう。ただし、この頃はまだ自衛隊の海外派遣は南極観測隊のみであり、なぜPKOを意識したのか記憶に鮮明でない。

平成5年にモザンビークPKOに司令部要員として派遣された。帰国後の平成6年からドイツへの留学を許され、語学教育の教官に誘われてカントの「道徳形而上学原論」を読んだ。そして、平成12年に在ドイツ防衛駐在官となる。42歳で人生の3目標を達成させていただいたことに、感謝の意を尽くせない。

ドイツでの任務を終え、青森の第5普通科連隊長を拝命した。その後は方面隊の調査部長など幕僚勤務と考えていたが、1年8か月後に師団長から示された異動先は内閣衛星情報センター。「君のキャリアを考えて、これが良いだろうと判断した」との温かいお言葉をいただき、外務省に続く内閣官房への出向となった。

申し分のない異動先であったが、警察・外務・防衛の思惑が入り混じった職場環境が私には合わなかった。ちょうどその頃、生まれ故郷の天城湯ヶ島町は平成の大合併で、修善寺・中伊豆・土肥と合併して「伊豆市」が誕生していた。高校の同級生から言われた「伊豆市が出来たんだから、オマエ、市長やれよ」が背中を押した。人生の3目標は達成した、普通科としては身に余る連隊長も歴任した、そして46歳で亡くなった父の歳を越えていた。よし、伊豆に帰ろう、市長を目指してみよう。

平成19年1月、内閣官房から防衛庁に復帰し、48歳で退官した。復帰の辞令は「防衛庁長官 久間章生」、退職辞令は「防衛大臣 久間章生」。それから一年かけて市内1万3千軒を3回訪問し、靴4足に穴が開き、平成20年4月の市長選挙に初当選した。

伊豆市は伊豆半島北部に位置し、南は天城峠、東は伊東市、西は駿河湾。面積 364k m²もあるが、人口は3万人を切った。私は二代目の市長。観光を中心とする経済は決して悪くないが、人口減少に歯止めがかからない。

市長就任直後の平成 20 年 6 月、「人口減少危機宣言」を発した。人口減少対策を焦点にすることで、産業、教育、住宅、福祉など政策を総合化できると判断したのである。「このまちを少し良くすることは難しくない」と安易に考えていたこの頃、その後壮絶な戦いになることは全く予期していなかった。

2 期 8 年で、幼稚園 4 園・保育園 6 園を整理し、小学校も 5 校を廃止した。学校設置は教育委員会の専権事項なので、市長は予算編成権しかないのだが、これで落選しなかったのだから市民もすごい。実は、その先に夢があった。3 中学校の統合である。小学校の統合は一つの学校を選んで改修したのだが、中学校は最高の立地に移転して、新築したかった。候補地は修善寺駅と赤十字病院から近く、構想策定の途中で別の病院が新中学校の隣に移転する計画も持ち上がった。新中学校を核として、こども園、病院、公園を一体開発する「文教ガーデンシティ」事業が固まり、地方行政で最大の難関である農地転用もクリアした。事業費 100 億円だが、合併特例の国の補助事業で財源は確保できる。この構想を選挙公約に掲げた 3 期目の選挙は何とか 1 万票を確保し、1 万：3 千で当選した。これで環境は整った・・・はずであった。

3 期目就任半年後の市議会議員選挙で、16 議員のうち 7 議員が新人となり、状況が一変した。その後の議会で重要案件が通らない。急遽、タウンミーティングを追加実施し、文教ガーデンシティ事業がいかに子育て世代にとって重要か、市民に直接訴えた。新中学校の危機に焦った中学校・小学校の P T A 有志が推進を求めてデモ行進も行った。平成 29 年 3 月の新年度予算は否決。P T A は新中学校推進を求める 400 名の請願を議会に提出し、反対派は現中学校維持を求める老人会 150 人の請願を提出した。議会の採決は、400 人の P T A を却下、150 人の老人会を採択した。そして、5 月 16 日、最後のチャンスであった臨時議会で最終的に否決された。特養で療養中の母が亡くなる 3 日前であった。

このとき、私は決定的な情報分析を誤った。否決すれば、合併特例債という財源を失い、農地転用は二度と協議できなくなり、病院は市外に流出する。「議会は否決できない」と考えた。彼らは否決するために議員になった、という事実を直視していなかったのだ。次の判断ミスは「議決の責任を取ることは想定していない」という議会の特性を理解していなかったことだ。最大の反省は、自分だけが 10 年同じ職に在ることの影響を軽視したことだ。私が市長に就任してしばらくは、先輩市議達から助けられて議案を成立させた。議案提出前日に取り下げたこともある。「次の定例議会を通すから、今回は下げてくれ」に従い、その通りになった。平成 29 年は、自分が 10 年在職し、多くの議員が新人であることに思いが至らなかった。

これについては市役所内でも同じ課題が浮き上がる。部課長は2～3年で異動し、部長は交替するときには退職である。部隊において地元の隊員がいちばん長く、指揮官は2年程度で交替する事象と真逆なのである。市長は2～3期目くらいで全国市長会の役員になる。年に4回の役員会があり、各省の幹部が最新情勢を説明する。市長は視察出張も多いが、職員は人事異動後の研修出張くらいである。情報は市長にのみ蓄積される。私が議会に、「中学校の統合については、私が市長になった平成20年の教育振興協議会からずっと議論してますよね？」と言ったところで、そのときの議員は3人しかいないのだ。

61歳になった今、働き盛りであることは間違いない。日々、勉強であり、鍛錬であり、戦いである。自衛隊での勤務は大いに役立っている。「嫌なことからやる」、「反対が49%でも賛成が51%あれば実行する」、「責任感こそが最重要資質である」等々。国を守ることも、地方を守ることも、一市民を守ることも、いずれも難しく、ゴールが見えない。今、防大の哲学の授業を思い出している。

「鏡にしようと瓦を磨いている。その姿こそが仏なのだ。」

◇今人生、男盛り（第25期生）（その2）

2020. 1. 3

「海陽学園における次代のリーダー育成」

25期陸 富樫 勝行



（はじめに）

2014年8月、40年4ヶ月の陸上自衛隊での勤務を経て退官、縁あって、同年11月愛知県蒲郡市にある海陽学園ハウスマスターとして採用された。自衛隊勤務の中でも、少年工科大学校、防衛大学校での寮生活、部隊での服務指導、教育訓練及び災害派遣、ドイツ留学、在壕防衛駐在官及び海外出張、そして連隊長や旅団長といった指揮官経験は、国際社会において活躍できるリーダーを全寮制の全人教育によって育成する海陽学園で活用できるとの思いがあった。

当初はハウスマスターとして、現在はハウスマスター統括兼ねてガイダンス部長（生徒指導部長）として約600人の生徒のハウス（寮）での規律ある共同生活、ハウスマスターの取りまとめ、学園の生徒指導全般に当たっている。ドイツ語講座や富士登山も担当し、正に「今人生、男盛り」の「やりがい」と「充実感」を存分に味わっている。

（海陽学園について）

ご存知の方も多いと思うが、海陽学園は、2006年4月、将来、世界で活躍し日本を牽引できるリーダーの育成を目的に中部地方の有力企業が中心となって設立された。英米では、長い歴史の中で、国の中核を担うリーダー養成校の多くは全寮制を採用しており、海陽学園設立のときから防衛大学校での学生舎（寮）生活を経験した自衛隊OBが関与している。生徒は、全寮制の規律ある共同生活をしながら、中学・高校の6年間かけて基礎学力と人間力を鍛える「全人教育」により世界で通用する力を身につける。

（フロアマスター）

唯一のシステムとして、協賛企業から入社数年目の男子社員約30名が1年余り、フロアマスターとしてハウスで生徒と寝起きを共にしながら生活指導に当たっている。3月の新着任研修では、豊川駐屯地での2日間の生活体験「規律ある団体生活研修」も実施している。彼らは、将来の企業や経済界のリーダー候補生でもあり、だからこそ次代のリーダーである生徒たちを指導できる。フロアマスターへのリーダー教育も私の仕事であり、自衛隊での勤務経験や統率教育が役立っている。強調していることは率先垂範、そして「指導は早めで具体的、仕事は任せるが確認もする。笑顔ではあるが馴れ合いで

はなく、小さなことも見逃さない。出過ぎず、下がり過ぎず、情報の集まる要点で、激高せず、早とちりせず、出番を間違えず、適時に決心し、責任をとる。」であるが、言うは易し、行ふは難しも実感している。

(生徒の日常生活)

生徒たちの毎日は、6時40分起床、7時から点呼、校歌斉唱など、7時20分には全生徒が食堂に集まり、当番生徒の号令で一斉に「いただきます」をする。約600人の生徒が揃って食事を始めることは、将来、社会で活躍するために大切な規律心、思いやり、マナーを身につける時間でもある。食事後授業に向かい、15時ごろにはハウスに帰ってくるとハウスタッフの後半戦が始まる。部活、あるいは図書館やハウスで過ごす生徒もいる。18時から夕食、入浴、買い物。19時半には清掃、その後、各ハウスで夜のハウスタイム（点呼と訓話）が始まる。ハウスマスターやフロアマスターが、生活指導や学習や受験のことばかりでなく、リーダー論や世の中の動きや常識、人生の教訓を生徒に熱く語る。将来の社会での活躍を見据えた刺激に溢れた時間でもある。20時から夜間学習、ハウスタッフに見守られながら、ラウンジや個室で受験勉強、宿題や予習・復習などをこなしていく。教科の先生が回って来たり、教室で高度な数学や受験向けの授業を受ける生徒もいる。ハウスが彼らの人生の道場である。

(キャリアデザイン)

生徒たちには、大学は通過点で、社会でどのように活躍したいかを見据えて学習や受験に取り組むことを強調している。毎年、トヨタ、JR 東海、中部電力などの協賛企業への企業訪問（高校生）や工場見学（中学生）、フロアマスターたちの経験や知識を活用した「ソサイエティ」と呼ばれるキャリア講座や教養講座（大学・学部、海外経験、企業や業界や仕事の紹介、趣味の講座）などもある。企業訪問では、エントリーシートを書かせ、就職活動さながらの体験をさせて訪問企業を決定する。訪問先では、企業戦略を学んだり、商品開発の疑似体験など社会人の先取り経験ができる。年に5.6回開催される特別講義では、トヨタ自動車の豊田社長はじめ、ノーベル賞受賞者など世界をリードしているリーダーや研究者などからの講義を聞いて生徒たちは夢を育んでいる。



5年生の富士登山（2019.8.26）山頂にて

(リーダー及びリーダーを支える経験)

海陽学園では、生徒に様々なリーダー及びリーダーを支える経験を与えている。ハウス自治の推進役としてハウス長やフロア長といったハウス幹部(学期毎の交代)、選挙で選ばれる生徒会長、学校行事としてのスポーツフェスタ、海陽祭(文化祭&演劇祭)、時事調査発表会、3年生の伊勢神宮研修、5年生の富士登山などでは生徒の実行委員会が立ち上がる。テーマ、生徒の組織化、内外との調整、予算、調達などの計画・実施、振り返り、生徒たちは日ごろハウスや教室で培った人間関係を最大限に活用し、教職員を巻き込みながらイベントの成功に向けて取り組んでいる。勉強は苦手でも、リーダーシップやコミュニケーション能力が高くイベントや部活で活躍する逞しい生徒たちの将来の活躍も期待している。

(多様な生徒たち)

科学の甲子園やキャリアの甲子園で全国優勝したり、理科や数学オリンピックなどで日本代表として世界大会でメダルを勝ち取ってきたり、模擬国連日本代表として国連本部での世界大会に参加する生徒たちが育っている。東大、京大、国公立大医学部や欧米の有名大学へ進学する生徒もいるが、パテシエを目指したり、芸大に進学したり、部活のスポーツ推薦で進学する生徒もいる。防衛医大や防衛大学校に進学する生徒も出てきた。私も毎年12月には、防大、防衛医大1次試験合格生徒に面接指導をしている。今年は防衛大卒業の陸上自衛官第1号が誕生した。



2018年度 ハウス A Team TOGASHI の仲間たち

(本当に伝えたいこと)

自衛隊という組織の力の源は、人を大事に育て、人と人を繋ぎ、すべての人の持てる力を組織化して任務達成に向けて動かすところにあると思う。人は人と繋がって、人を助け、人に助けられ、互いに協力しながら、生かされていることを自覚し感謝することが大事だと思う。生徒たちには、その上で、人と人を繋げ、社会や組織をリードしていく人材になって欲しいと思う。私自身が小原台で学んだように、海陽学園を卒業した生徒たちが、「人生に必要なことは、ハウスで学んだ」と言ってくれることを期待している。そして海陽学園卒業生の財産は、防衛大卒業生のように6年間寝食と苦楽を共にした同

期生の横の絆と先輩・後輩の縦の絆である。卒業生はまだまだ少ないものの企業、医者、会計事務所、コンサルタント、公務員、記者など様々な分野で活躍し始めている。企業からフロアマスターとして海陽学園に戻ってきた1期生もいる。海陽学園の卒業生たちが、競い合い、助け合いながら世界で活躍してくれる姿が楽しみである。

◇今人生、男盛り（第25期生）（その3）

2020. 1. 3

「退官後の活動紹介」

25期海 池田 徳宏



25期生海上要員を代表して私が「小原台だより」に投稿する機会を得ました。25期海上要員は村川海上幕僚長が本年4月に退官し全員が自衛隊を退職しました。それぞれが諸所で第二の人生をスタートしています。私自身も海上自衛隊を退官して3年以上が経過し民間企業に就職していますが、今日は自分の第2の人生の話ではなく、25期海上要員の自衛隊退官後の活動について2件紹介をしようと思います。

1件目は同期の月例ゴルフ会についてです。25期海上要員は毎月厚木基地で月例ゴルフ会を実施しています。記録に残っているのは平成25年からですが、その2年ほど前から実施していたという同期の証言もあり、正確なところは不明ですが8年間程続いている会です。これまで参加した同期は30人程度います。最初の頃は厚木・横須賀・市ヶ谷等首都圏勤務の現役が主力でしたが、徐々に退官する者があり防衛関連企業に再就職した者は参加できなくなり、参加者が徐々に減少し細々と継続した時期もありました。これがいつの日か退官者数が増加し退官者の月例ゴルフ会になり今度は現役隊員が参加できなくなりました。ある時期には毎月3人程度で開催し続けたこともありましたが、現在では毎月15人程の参加を得て盛況に実施しています。継続の秘訣は、優勝者が次回幹事を務めるという決まりがあるということと、海上自衛隊を離れて慣れない民間企業で働く者にとって同期の月例ゴルフ会が情報交換の場となり、毎月の楽しみになっているからだと思います。不慣れな幹事が就いて連絡が遅れると催促のメールがやり取りされる程、皆が楽しみにしているイベントになっています。このように盛んにゴルフ会を行っている海上要員ですが防大同窓会のゴルフ大会出場のための25期予選会では陸空要員におされて予選通過者が少ないのが残念なところですが、更に盛り上げて予選通過目指して頑張りましょう。

2件目は月例懇親会についてです。25期海上要員は月例ゴルフ会だけでなく、懇親会も毎月行っています。この懇親会は「ミニミニ会」といいます。幹部候補生学校32期のミニと少人数でも毎月簡単に集まる会という意味を込めて「ミニミニ会」と名づけられました。毎月第二火曜日に都内の同じ場所で行っています。同期の半数以上が退官した頃から毎月行っていて4年以上続けています。遠方から東京に出張等で来る者がいる場合は、実施日を多少調整して極力久しぶりの再会ができるような工夫もしています。最近は毎月

10名程度が集まり情報交換の場所となっています。防大同窓会名簿の作成要領見直しにともない25期海上要員の名簿は担当者の努力のお陰でしっかりと整備され、ミニミニ会の案内も登録されたメールアドレスを活用して行うようになりました。これに皆が出欠の返信をしてくるのですが、ある時、地方在住でなかなか参加できない同期から欠席通知とともに近況報告が送られてきました。これを幹事がメール配信したところ、多くの同期が近況を付け加えるようになり毎月A4用紙4枚程度の同期近況報告が配信されるようになり、多くの同期が近況を綴りこれを読むのを楽しみにしています。

今回は、その中から何人かの近況を匿名で紹介したいと思います。

1. 防大と深く関係した仕事に就いている同期：

「私の仕事は、市役所において防衛関係者（防大を含む）との連絡調整に関することを担当しています。防大とは学校長等の離着任時の表敬調整、防大成人式の市長挨拶の原稿作成や展示飛行の市民への周知など防大と市役所の架け橋となっています。

2. 家を自分で建設中の同期：

「田舎で結構忙しくしているので今回も参加できません。以前紹介したセルフビルドの方はいよいよ今週末から基礎工事の開始です。・・（自営（梨栽培））」

3. 仕事のためいつも参加できない同期：

「ミニミニ会には時間・場所ともに参加は不可能な状況です。とはいえながら、写真に写る皆さんの元気な顔に勇気づけられます。」

4. ボランティア活動をしている同期：

「大学アメフトリーグの学校役員としてリーグ戦運営支援をしたり、ラグビーワールドカップのサポーターとしてのボランティア活動に参加したりして結構忙しくしています。自宅建設の同期に比べればたいしたことはありませんが。」

5. 退官後も単身赴任中の同期：

「先日の上京の際は集まってくれてありがとう。同期の顔を見ると一瞬で数十年前に帰ったような気がしました。当方片田舎で単身赴任にて奮闘中です。近くに來られる予定があれば是非お知らせください。案内します。」

6. 民間航空会社パイロットの同期：

「先日定年退職いたしましたが、パイロット不足の折、継続して国内線、国際線に乗務しています。」

その他、原子力規制庁の地方事務所に勤務している同期、航路水先案内人をしている同期や大型船船長の資格取得のために外洋航路船舶乗組員として活躍している同期等の近況を皆で共有して盛り上がっています。何より健康で楽しく過ごせるよう同期の繋がりを大切にしようという取り組みを紹介しました。後輩クラスの参考になれば幸いです。

◇今人生、男盛り（第25期生）（その4）

2020. 1. 3

「恩返しと挑戦」

25期空 吉田 浩介



航空自衛隊を退官して3年が経過、生命保険会社の顧問として第二の人生を歩んでいます。現役時代は千歳、市ヶ谷、十条、目黒、横田、岐阜、小松、新田原で勤務しました。家族にとっては転勤の連続で、防衛駐在官の時代はモスクワに住みました。ちょうどその時期に子供達の高校受験と重なり、長女は英国に留学し寄宿舎生活、次女は単身帰国し寮生活を送りました。東京に自宅を構えてからは単身赴任となりましたが、自衛官としての人生を振り返った時、本当に家族の理解と支援無くして務めることは出来なかったとつくづく感じました。

我々25期生の航空要員は、卒業時に85名だったと記憶していますが、航空大事故で2名（故鈴木君、故酒井君）、病気で4名（故塔鼻君、故西野君、故常原君、故吉井君）の計6名の仲間を失いました。それを考えると退官し還暦を迎えることができた事だけでも凄いことであり、天国から見守ってくれている同期生のご加護だと感じています。歩んでいます。

還暦を迎えると健康な生活があと何年送れるのかと不安になります。これは還暦を迎えてみないと解らない心境だと思います。関西出身の家内は『残りの人生は儲けもの、楽しまなければ損、損』が口癖です。やるべきことはやったのだから、健康なうちにもっと楽しもうと言っているのです。私は第二の人生において恩返しと挑戦をモットーとしています。

私には二人の娘が居て、二人とも結婚し一男一女の子供を授かっており、この歳にして既に小学校一年生を筆頭に4人の孫がいます。ほぼ毎週末、娘達は子供と旦那様を連れて実家に帰ってきて、全員揃って夕食を取っています。また、娘達、孫達にスキー用品一式を買い与え、冬には妙高高原や野沢温泉へスキーに出掛け、夏には別荘一棟を貸し切って、子供達夫妻と孫達全員で出かけることが年中行事になっています。このような機会を通じて少しでも家族への恩返しになればと願っているのです。



妙高高原池之平スキー場にて



軽井沢の貸別荘にて還暦祝

恩返しと言えば、現役時代に変にお世話になったのが防衛関係諸団体です。特に航空自衛隊の基地は戦闘機による騒音で地元で迷惑を掛けているにもかかわらず、基地や部隊を支援していただいているのが防衛協会、隊友会、つばさ会に代表されるOB会等です。退官して直ぐにそれぞれの会に入会すると共に、全国防衛協会連合会及び東京都防衛協会では、常任理事として県や支部で行われる会合に併せて講演したり、会員の方々の活動を支援しています。隊友会では常務執行役として会勢の拡大、機関紙隊友の編集、各種ボランティア活動を担当しています。また、防大の学生時代に所属した防大山岳部の校外顧問として現役の活動を支援しています。更に40歳を超えてからテニスを始め、その後に勤務した基地ではテニス部に所属しました。テニスを通じて人間のネットワークが広がり、公私ともども支えてくれました。より多くの隊員にテニス部活動を通じたネットワークの素晴らしさを味わってほしいと思い、全自衛隊テニス連盟の会長として全国の駐屯地、基地における部活動の活性化に尽力しています。その他、米空軍から防大へ8月から12月までの間、留学に来る候補生のホスト・ファミリーを務めています。いずれの活動も恩返しのつもりが、いつの間にか第二の人生の生き甲斐になっています。

第二の人生におけるもうひとつのモットーは挑戦です。

高校時代から防大と山岳部に所属して様々な活動をしてきましたが、この歳になるまで登ったことが無い山が沢山あり、退官後は現役時代に出来なかったことをやろうと心に決めました。そのため退官してからはお昼休みを利用して週3回は皇居を1周駆け足して体力練成をするように心掛けています。

退官した28年は、針の木雪渓を登り針の木岳から爺が岳までテント泊で縦走しました。また、八方尾根を登り唐松岳から不帰のキレットを経由して白馬鑓ヶ岳、朝日岳までテント泊で縦走しました。また、この年は北海道の利尻岳、青森県の岩手山にも登りました。



後立山連峰白馬鑪が岳より朝日岳を望む



爺が岳南峰の山頂にて

29年は涸沢から北穂高岳に登り、大キレットを経て槍ヶ岳、双六岳まで縦走しました。この時は岩稜地帯であり、疲労を抑えるために小屋泊としました。この年は他に山形県の鳥海山にも登りました。



涸沢小屋より前穂高岳を望む



越えてきた大キレット、北穂高岳を望む

30年は遠見尾根に登り五龍岳から八峰のキレットを経て鹿島槍ヶ岳、爺が岳まで縦走しました。これにより、後立山連峰を針ノ木岳から朝日岳を経て日本海まで完歩しました。



鹿島槍ヶ岳南峰より北峰を望む

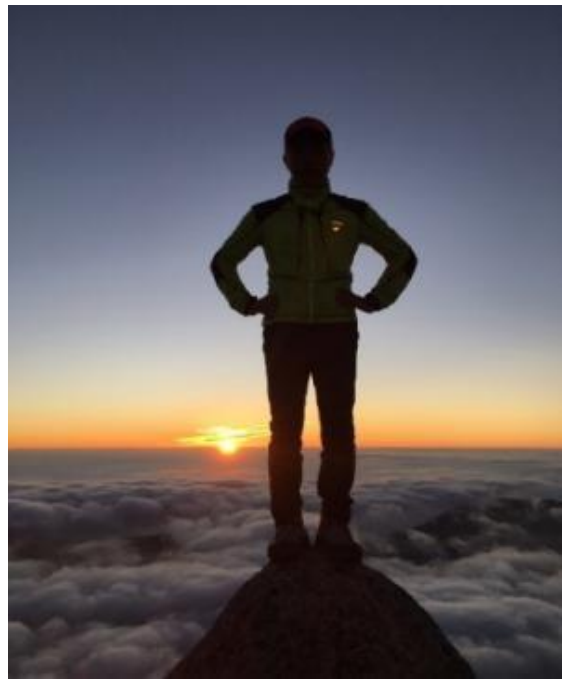


爺が岳北峰の山頂にて

今年は、富山県側の有峰口から太郎平に登り、薬師沢を経て雲の平、三俣蓮華岳、黒部五郎岳まで縦走しました。小屋泊まりでしたが、家内が初めてバテて、最後は二人分のザックを担ぎ、日没ぎりぎりに小屋に到着できました。悪いイメージを持ったまま一年を終わるのが嫌だったので、表銀座と言われる中尾新道を登り燕山荘にテントを張り、燕岳、大天井岳を往復してきました。



雲ノ平より薬師岳を望む



燕岳頂上で迎える日の出

『なぜ、そんなに生き急いでいるのか?』と言われるくらい、家族のため、現役のため、そして自分のために、何者にも縛られることなく、やりたいことをやりたい放題の充実した日々を重ねています。

◇第2期生からのメッセージ

皆さん、こんにちは、2期生会会長の水野と申します。

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。

学校での専攻は、海上の機械工学、部活は、入校最初から最後まで一貫して空手部にいましたが、卒業前にやっとこ黒帯を頂いたという非力者です。

それでは、皆さんに報告したい本論ですが、「第一は2期生会と同窓会との今後の関係
第二は2期生会の今後の在り方」この2点です。

先ずは期生会と同窓会の今後の関係ですが、まさに「同窓会有りて、期生会あり」の存在で、私が、会長時だけでなく、この60年の間、本当に色々お世話になり、それを具体的に上げれば枚挙にいとまありませんが、直接的には、同窓会規約の事業・活動の最初に挙げている、「会員相互の親睦・交流に関する事業」であり、各期のジェネレーション・ギャップを越えての、また陸・海・空の統合活動に貢献していただいていることに、私なりに、最大の感謝をしています。

まさに、同窓会有りて、期生会有りの存在です。したがって、同窓会に対しては、本心は今まで通りの関係をお願いしたいところですが、寄る年波は、心身ともにお世話になるばかりで、組織に対し何の力もなく、協力もできないという自覚、また何か問題が生じた場合、同期のなかだけでは処理できず、期生会を越えて、他の期に迷惑をかけるという不安と、多くのことをやっただいていてという感謝の思いを、しっかりと感じて受け止められる年齢、その時点が今で「期生会としての同窓会活動の終了」、を正式に通知させていただきます。

解散等に関する規約から、その連絡は1年前を基準ということで、本年はすでに経過していますが、年度末ではなく本年12月末で、終了をお願いできればと思っています。その時期は無理ということであれば同窓会の規約上の取決めに従いますが、来年の代議員の委嘱は辞退、代議員会、総会には参加はしないということです。

次に、2期生会の今後の在り方ですが、関連して私の好きな言葉の中に、格言と言いましょうか「人有りて、われ有り」があります。

昭和29年の4月、国鉄横須賀線の久里浜駅北口に集合した、約400人、60年以上前のことですが、その時初めて出会った仲間と共に進む将来の方向はまだ確定したのではなく、その不安な気持ちは、現在でもしっかりと思い出します。

しかし、その時出会った仲間が、その後陸・海・空に分かれても、現在も各地域で定期的に集まり、まさに統合の多様性ある情報交換をしあう仲間として続いている、此の期生会の仲間がいて、現在の自分があることは、全く疑う余地がない事です。「2期生会」の人有り、現在の我あり、です。

勿論私だけでなく集まる会員は皆同じ気持だろうと思います。従いまして、2期生会は、役員が高齢に伴い多少手抜きしながらも、何か問題が生じても同期生の中だけの問題として処理できる安心感もあり、現状維持、解散は致しません。

結論的には、「期生会の解散等に伴う同窓会の対応（案）」に関連し、二期生会の組織及び独自の活動は存続するが、「令和2年12月末日をもって、期生会としての同窓会活動を終了する」ことを連絡します。

最後になりましたが、同窓会会員及び、役員の皆様のご健勝と、同窓会の益々の発展をお祈りして、同窓会活動終了通知のご挨拶とさせていただきます。本当に有難うございました。

令和2年3月31日

2期生会会長 水野 信夫

■活動報告

◇第7期生ホーム・カミングデー2（HCD2）

2019. 4. 20

第7期生ホーム・カミング・デー2（以下、HCD2という。）が、平成31年4月5日（金）に行われました。

HCD2は、國分学校長の発意により始まった入校式に同窓生を招待する行事で、平成28年から始められました。第1回は第1期生から第4期生が招待され、第2回は第5期生、第3回は第6期生が招待されました。第4回目の今年は第7期生が招待され、第7期生とご家族合わせて159名が行事に参加されました。

第7期生は、入校式も卒業式も雨模様だったそうですが、HCD2の4月5日（金）は晴天に恵まれました。満開の桜の下、7時45分（8時開門予定が父兄等長蛇の列ができたため15分早められました。）の開門と同時に第7期生とご家族は、正門右側の専用入り口を通過し、控室のある防衛学館に向かいました。正門付近には同窓会旗、経路上の要点には誘導支援の要員が配置され、全参加者はスムーズに入門されました。

防衛学館到着後は陸・海・空の要員毎に準備された受付で出欠確認し、資料を受け取り控室に入られ、久しぶりの再会に思い出話や近況報告に花を咲かせました。海上要員の控室には自衛艦旗が用意されました。また陸上要員の控室には式典会場に入れない参加者のためにライブ中継も準備されました。



正門前の様子



受付の様子



海上要員控室の様子



陸上要員控室ライブ中継画面

入校式に先立ち、代表者が顕彰碑（第7期生は陸2名、空1名の同期の名前が収められています。）を参拝し花輪をささげました。



顕彰碑での献花



控室での注意事項説明

受付が終了し、参加者全員が揃ったところで、控室で注意事項の説明が実施され、式典会場に向かいました。会場に入る前に時計台下で國分学校長をはじめ防大の主要な職員を囲んで集合写真を撮影しました。



國分学校長を囲んでの第7期生HCD2参加者全員の記念写真

入校式が実施される記念講堂内には、学校側のご配慮で、第7期生HCD2参加者全員の座席を確保いただきました。また、車椅子での参加者にも専用席が用意され、学校教官が常時サポートに就いていただきました。HCD2参加者全員が記念講堂内に入場できたため、防衛学館に準備されたライブ中継施設は支援いただいた学校職員の方の観覧席となりました。

入校式は、10時の原田副大臣の臨場とともに開始され、本科第67期生のほか、理工学研究科前期課程前期、後期及び総合安全保障研究科前期課程の入校式も併せて実施されました。

國分学校長の式辞では、留学生を含むすべての新入生に対しお祝いの言葉及び、原田副大臣をはじめとする多くの来賓の方々やご家族に対しお礼の言葉を述べられた後、「60年前に入校された第7期の先輩方が、新入生諸君を激励するために多数参列されています。ご参列の皆さま、戦後日本の防人として、我が国の独立と平和と安全に大きな役割を果たされた第7期生の大先輩達の晴れやかな凱旋に対して盛大な拍手をお願いします。」と紹介され、参列されている第7期生とご家族の方々は全員が立ち上がり、会場全体からの拍手に対して敬礼で謝意を表されました。



國分学校長の式辞



会場からの拍手に敬礼で謝意を表す第7期生

学校長は引き続き、アメリカの詩人ウルマンの青春賛歌の一節を取り上げられ、「新入生の皆さんが防大進学を選ぶという決断が、ウルマンの言う青春の見事な体現であります。」と敬意を表されました。

また、学校長として8年目を迎え、防大が日本一の大学であると自負しており、世界の士官学校を目標として「さらなる高みプロジェクト」を構想中であることを述べられました。更には「防大の前身である保安大学校の記念碑が久里浜に建立され、そこに集まった第1期生、第2期生が往時を語り合う姿を見て改めて建学の精神に立ち返ることの意義を感じました。」と述べられました。

最後に、楨初代学校長が第1期生に対し、「偏することなき均衡のとれた人物を目指すこと」並びに「民主制度に対して的確な理解を持つこと」を任務として熱く求められ、「個人の自由は放縦ではなく、正しきことを目指すことにおいてのみ個性の発展があり、正しき行いにおいてのみ自由があるのであります。」と語られたことを紹介され、この言葉の重みを忘れないようにと述べられました。

原田副大臣は訓示で、「我が国を取り巻く防衛環境が大きく変化していることを踏まえ、しっかり修学に励んでもらいたい。」及び「多次元統合防衛力構築に向け研究科学生に対し期待する。」と述べられました。

増子統合幕僚副長は祝辞で、本科学生に対しては「同期の切磋琢磨」、「統合運用体制強化の要たれ」の2点を要望されるとともに、研究科学生に対して、「防衛技術の進展が著しく防衛環境の変化も大きい中であってそうした変化に対応し得る力をつけてほしい。」と述べられました。



原田副大臣の訓示



増子統合幕僚副長の祝辞

入校式終了後、参加者は陸上競技場に移動しHCD2参加者用のため、新入生である第67期生の隣に用意された座席に着席し、学生隊のパレード、展示飛行、儀仗隊のファンシードリルなどを見学されました。展示飛行の際には、車椅子での参加者に対しては、サポート役の防大教官が見えやすいように車椅子の向きを変えるなど、細やかな心配りがなされていました。また最後に実施された儀仗隊の華麗な演技にはHCD2参加者から大きな拍手が送られていました。



國分学校長による巡閲



車椅子参加者に対する
細やかなサポート



第7期生と第67期生



儀仗隊の華麗な演技に対する拍手

パレード見学を終えたHCD2参加者は、定期バスに加え第7期生が個別に依頼した臨時バスを使って小原台を後にして、懇親会会場である横須賀セントラルホテルに向かわれました。

國分学校長を迎えて15時に開始された懇親会は、第7期生とご家族を合わせて155名が参加され、演劇部OB佐藤氏の司会で、期生会長佐々木氏の挨拶に引き続く海部会長平賀氏の乾杯で開始されました。

学校長は、第7期生に対し現役の防大生に接するかのような親しみを込めたユーモアたっぷりの口調で挨拶をされ、第7期生は大いに喜んでおられました、特に第7期生に対し「特別外出も許可する。」とのくだりでは大喝采が起きました。

岩崎同窓会長の挨拶は、「一回り年下の後輩として緊張しています。」との言葉に始まり、空幕長当時初めて会った國分学校長の印象を、ユーモアを交えて紹介され、國分学校長のリーダーシップにより新たな行事の開催など変革が進められたことが紹介されました。



司会の演劇部OB



期生会長挨拶



学校長挨拶

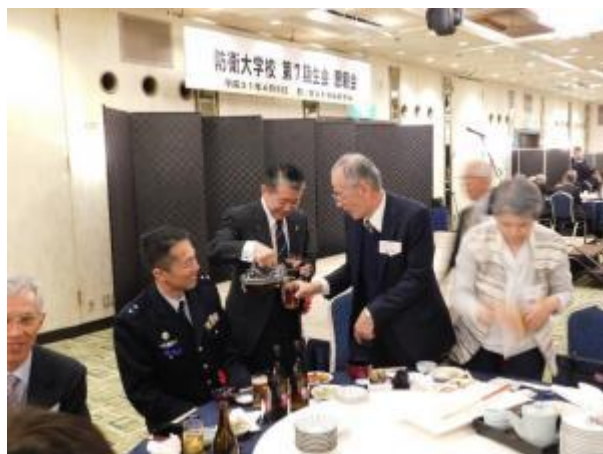


同窓会長挨拶

第7期生に対し「特別外出」を許可した國分学校長は、懇親会の終始を通じて大人気で、第7期生が入れ代わり立ち代わり懇談されていました。岩崎同窓会長は、一回り先輩のテーブルを回られ、若かりし頃頂いたご指導への感謝などを述べられていました。



学校長を囲む第7期生



テーブルを回られる同窓会長

着座式の懇親会でしたが、話が盛り上がるにつれ立食パーティーの様相を呈するテーブルもあり、奥様方もまるで同期の会のように親しく話をされていました。

話は尽きない状態でしたが、予定の時間が迫ったため、吹奏楽部OB村木氏の指揮で学生歌斉唱が行われ、空部会長の江藤氏の万歳三唱で名残惜しい懇親会はお開きとなりました。



一部は立食パーティー化



学生歌斉唱は吹奏楽部OB



空部会長による万歳三唱

おわりに、第7期生のHCD2実施に向け、2年前から準備を進められた第7期生会役員の皆様のご活動に心からの慰労を申し上げますとともに、準備から本番まで親身になってご支援をいただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

(28期陸 平野剛 記)

◇第43期生ホーム・ビジット・デー（HVD）

2020. 1. 16

爽やかな秋空の下11月16日、17日の両日、令和元年度開校記念祭の開催に合わせて、第43期生は卒業20周年にあたり、ホーム・ビジット・デー（HVD）を開催し、数多くの参加者が旧交を温めることができました。

我々、第43期（平成7年4月入校）は、第4期目となる女性の本科学士を受け入れたことにより全学年に女子学生が配置された最初の年となりました。卒業から20年間、我が国の防衛のため、国内外の行動任務等における現場指揮官、防衛力整備を担う幕僚のほか、防衛駐在官として各国との関係強化等に従事しております。また、母国に帰国した留学生は各国軍隊における主要幹部として、自衛隊を退職した同期生は各企業及び自治体等において活躍しております。

さて、第43期生HVDは、11月16日に前夜祭として、卒業生のみによる懇親会を実施し約80名が参加し、翌17日には母校において、ご家族を含め約250名が集まり、経年劣化したお互いの風貌を確認したほか、家族間の交流を図り、昔を懐かしむとともにお互いの近況を情報共有する等、同期団結の強化を図ることができました。卒業後、初めて母校を訪れた同期生からは、本館、記念講堂、学生舎、学生食堂及びラグビー場の変貌に驚くとともに、学生会館から見下ろす東京湾など懐かしい面影を確認し、改めて20年の歳月を確認することができました。

HVDはまず、4月から開催準備の中核を担った4名の代表者（期生会長鎌田（空）、天内（陸）、江畑（海）、池尻（空））による國分学校長への表敬を実施し、HVD開催に関する謝辞を伝えました。



代表者による学校長への表敬

メインイベントである懇親会は、志津（空）、角（海）の司会のもと、期生会長鎌田（空）の挨拶、2週間前の準備MTGを休んだために指名された大崎（陸）による乾杯で開始されました。また、留学生が参加できなかったため、留学生似の渡邊（空）による代

理スピーチが実施され、持ち前のトーク力を遺憾なく発揮し、会場の爆笑を一気にさらっていました。

同懇親会には、ご多忙のところ國分学校長にお越しいただき、管理職となった我々をサンドイッチに例えて、「具のないサンドイッチは美味しくない」とその重要性をお話しされるなど、激励のお言葉を賜りました。

また、岩崎同窓会会長からは、HVDのほか、約20年後、防大卒業式に招待されるホーム・カミング・デー（HCD）についても紹介され、同窓会活動への理解を促進しつつ、引き続き期生会活動の活発化を進めるよう、お言葉を賜りました。

第43期生会からは、在校生に「姿見鏡」を贈呈させていただき、学生隊による検討結果の末、第1大隊に設置されることになりました。

應援團リーダー部による口上に引き続き、参加者全員による逍遙歌を斉唱しました。應援團リーダー部には女性団員もおり、男子団員にも負けない気迫をみせてもらいました。

最後に、本イベントの功労者の1人である、第3大隊首席指導教官の近藤（陸）による一本締めを実施し、全員で写真撮影を実施し、懇親会を終了しました。また、紙面をお借りし、同じく功労者である防大防衛学勤務の染谷（陸）にも感謝したい。



司会進行の志津（空）、角（海）



乾杯の挨拶をする大崎（陸）



岩崎同窓会会長と会長現役時の部下の皆さんとの懇談



寄贈した姿見鏡（第1大隊に設置）



留学生不在のため代理で挨拶する渡邊（空）



功労者の一人、近藤（陸）の締め挨拶



学校長、同窓会会長を囲んで同期のご家族と一緒に集合写真

（第43期生会長 鎌田 淳 記）

◇令和元年度防衛大学校同窓会臨時代議員会（実施報告）

令和元年度代議員会は、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴うイベント中止等要請及び防衛省のイベント参加自粛対応を受けて、当初予定していた参集して行う代議員会を中止とさせて頂きました。しかしながら、同窓会として年度事業計画等の議決が必要なため、資料郵送による臨時代議員会を開催して議案の議決と報告・情報提供を行わせていただきました。以下その概要について報告します。

1 全般

令和2年3月、代議員の皆様に対し臨時代議員会の開催をご承認頂きたく返信はがきで回答をお願いしたところ、過半数（147名／265名）の承認を得て臨時代議員会が成立いたしました。**【臨時代議員会の成立】**

そして、臨時代議員会において代議員会で審議予定であった下記4つの議決事項について代議員のはがき回答による議決を行い、ご承認頂きました。**【議案の承認】**

- 第1号議案 会則改正（目的及び事業、寄付手続き）
- 第2号議案 平成30年度同窓会事業報告・会計決算報告・会計監査報告
- 第3号議案 令和2年度同窓会事業計画（案）・事業予算（案）
- 第4号議案 令和2年度同窓会役員を選出

この臨時理事会にあたり、第2期生会会長より、第2期生会は令和元年度で組織的活動を終了するとの報告がありましたので、第2期生会会長からのご挨拶は次のとおりです。

参照第1：「第2期生会会長あいさつ」

なお、代議員・地域支部長の皆様から頂戴しました意見やご質問に対しましては、事務局より個別にメールにより回答させていただきます。

2 会則の改正

（1）目的及び事業

同窓会事業のこれまでの実績と現況を踏まえて、目的及び事業の記述の優先順位を変更し「母校の充実・発展」を最初に記述しました。また、目的と事業・活動の用語を整合させました。

参考：（目的）第4条 本会は、母校の充実・発展、会員相互の親睦・交流及び社会活動に寄与すること等を目的とする。

参照第2：「会則の改正（目的及び事業）」

（2）寄付手続き

平成30年度代議員会においてホームページに寄付口座掲載の要望及び将来的な収入源確保の必要性に関する問題提起があり、本部事務局において同案件に関する検討を実施しました。

これまで会則第33条に収入の一部としての規定はあるものの寄付手続きの規定が

なかったため、会則に寄付金の納入要領は細則によることを新たに規定し、「防衛大学校同窓会寄付金に関する細則」を定めました。

期生会、同窓会会員皆様は本趣旨をご理解いただき、母校の充実・発展等のため、今後積極的な寄付をお願いいたします。

参照第3：会則改正（寄付手続き）

3 「防衛の務め」再刊行支援事業（第3号議案の一部）の追加

初代学校長榎智雄氏の著書である「防衛の務め」は、未だに学生の精神的支柱として学生教育に活用されております。一方、平成21年に復刻版が再販されたものの現在絶版しており購入できない状況にあります。また、防大の図書館にも十分な数はありません。そのため、令和元年12月、防大から同窓会に対し「防衛の務め」の再刊行に必要な同窓会への支援要望があり、その要望に応えるための事業です。

事業内容としましては、学生が購入することを前提として「防衛の務め」の再刊行に必要な経費立替をするため、令和2年度に特別会計として300万円（1500冊分）を予算計上するものです。購入した「防衛の務め」は小原台事務局で適切に管理し、今後学生が購入する冊数分の代金を逐次同窓会本部に返金致します。

なお、同窓会員の皆様にもご購入頂けますので、ご希望がございましたら同窓会本部事務局までご連絡ください（送料はご負担頂きます。）。

4 同窓会本部からの報告・お知らせ

「令和元年度同窓会事業の実施状況」、「支部助成基準」、「期生会の解散等に伴う同窓会の対応」について、代議員の皆様へ資料をもって報告させて頂きました。

このうち「支部助成基準」については同窓会ホームページ「会則等」に「防衛大学校同窓会における地域支部等に対する支援に関する細則（第9号）」として掲載させていただきます。

また、同窓会からお知らせ事項として以下3点を資料で連絡させていただきました。

- ①令和元年8月以降、期生会として実施する会議については、同窓会事務局会議室の使用料を無料としたこと
- ②令和2年度以降、一定の使用条件のもと、校友会OB会から要望があれば「住所貸し及び郵便物の受け渡し」の無料実施を試行すること
- ③令和2年度の代議員会・講演会・懇親会は、令和3年2月27日（土）に「第一ホテル東京」（JR新橋駅近く）で実施することを予定（例年実施している「明治記念館」は令和3年2月より長期修繕により休業となるため。）。

（終わりに）

新型コロナウイルスの蔓延が早期に終息し、同窓会員の皆様におかれましても益々ご健勝で過ごされ、同窓会の各種事業及び代議員会等でお会いできることを楽しみにしております。

（28期陸 河本 宏章 記）

第 2 期生会会長あいさつ

皆さん、こんにちは、第 2 期生会会長の水野と申します。

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。

学校での専攻は、海上の機械工学、部活は、入校最初から最後まで一貫して空手部にありましたが、卒業前にやっとこ黒帯を頂いたという非力者です。

それでは、皆さんに報告したい本論ですが、「第一は 2 期生会と同窓会との今後の関係 第二は 2 期生会の今後の在り方」この 2 点です。

先ずは期生会と同窓会の今後の関係ですが、まさに「同窓会有りて、期生会あり」の存在で、私が、会長時だけでなく、この 60 年の間、本当に色々お世話になり、それを具体的に上げれば枚挙にいとまありませんが、直接的には、同窓会規約の事業・活動の最初に挙げている、「会員相互の親睦・交流に関する事業」であり、各期のジェネレーション・ギャップを越えての、また陸・海・空の統合活動に貢献していただいていることに、私なりに、最大の感謝をしています。

まさに、同窓会有りて、期生会有りの存在です。したがって、同窓会に対しては、本心は今まで通りの関係をお願いしたいところですが、寄る年波は、心身ともにお世話になるばかりで、組織に対し何の力もなく、協力もできないという自覚、また何か問題が生じた場合、同期のなかだけでは処理できず、期生会を越えて、他の期に迷惑をかけるという不安と、多くのことをやっていたという感謝の思いを、しっかりと感じて受け止められる年齢、その時点が今で「期生会としての同窓会活動の終了」、を正式に通知させていただきます。

解散等に関する規約から、その連絡は 1 年前を基準ということで、本年はすでに経過していますが、年度末ではなく本年 12 月末で、終了をお願いできればと思っています。その時期は無理ということであれば同窓会の規約上の取決めに従いますが、来年の代議員の委嘱は辞退、代議員会、総会には参加はしないということです。

次に、2 期生会の今後の在り方ですが、関連して私の好きな言葉の中に、格言と言いましょうか「人有りて、われ有り」があります。

昭和 29 年の 4 月、国鉄横須賀線の久里浜駅北口に集合した、約 400 人、60 年以上前のことですが、その時初めて出会った仲間と共に進む将来の方向はまだ確定したのではなく、その不安な気持ちは、現在でもしっかりと思い出します。

しかし、その時出会った仲間が、その後陸・海・空に分かれても、現在も各地域で定期的に集まり、まさに統合の多様性ある情報交換をしあう仲間として続いている、此の期生会の仲間がいて、現在の自分があることは、全く疑う余地がない事です。「2 期生会」のひと有り、現在の我あり、です。

勿論私だけでなく集まる会員は皆同じ気持だろうと思います。従いまして、2期生会は、役員が高齢に伴い多少手抜きしながらも、何か問題が生じても同期生の中だけの問題として処理できる安心感も有り、現状維持、解散は致しません。

結論的には、「期生会の解散等に伴う同窓会の対応（案）」に関連し、二期生会の組織及び独自の活動は存続するが、「令和2年12月末日をもって、期生会としての同窓会活動を終了する」ことを連絡します。

最後になりましたが、同窓会会員及び、役員の皆様のご健勝と、同窓会の益々の発展をお祈りして、同窓会活動終了通知のご挨拶とさせていただきます。本当に有難うございました。

令和年2月3月31日

2期生会会長 水野 信夫

会則改正（目的及び事業）

1 趣旨

同窓会の組織が完成期を迎え、同窓会事業のこれまでの実績と現況を踏まえて目的及び事業の記述の優先順位を変更する。

2 現行の規定

（目的）第 4 条

本会は、会員相互の親睦、母校の発展及び社会活動に寄与することを目的とする。

（事業・活動）第 5 条

本会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び活動を行う。

- （1）会員相互の親睦・交流に関する事業
- （2）母校の充実・発展に資する事業の協力と援助
- （3）防衛意識の向上・普及活動
- （4）社会活動に資する事業
- （5）その他前条の目的を達成するために必要と認める事業と活動

3 改定後の規定

（目的）第 4 条

本会は、母校の充実・発展、会員相互の親睦・交流及び社会活動に寄与すること等を目的とする。

（事業・活動）第 5 条

本会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び活動を行う。

- （1）母校の充実・発展に資する事業への協力と援助
- （2）会員相互の親睦・交流に関する事業
- （3）社会活動に寄与する事業
- （4）防衛意識の向上・普及活動
- （5）その他前条の目的を達成するために必要と認める事業と活動

4 改定理由

以下により、「母校の充実・発展」を先に記述する。

- （1）防衛大学校・学生に対する期待の高まり
- （2）同窓会に対するニーズが逐年拡大し、同窓会も対応
- （3）会費納入の合理性（新規会員の納得）
- （4）優先順位と記述の順番の整合

5 その他

- (1) 本改訂に併せ、(組織) 第3条4項の「防衛庁」の記述を「防衛省」とする。

また、「・・・並びに海外支部とし」を「・・・海外支部ごととし」と修正し、表現を前文の「基地等ごとに」と整合させる。

- (2) 改定後の規定

(組織) 第3条4

支部は、原則として防衛省職員である会員（以下「現職会員」という。）については各駐屯地・基地等ごとに、また防衛省を退職した会員（以下退職会員という。）については会員が居住する各都道府県単位に組織する地区支部又は拡大地区支部、地区支部を統括・調整する地域支部及び複数の地域にわたる本部直轄支部並びに海外支部ごととし、その構成及び運営要領等は細則による。

- (3) 令和元年度代議員会において審議し、令和2年4月1日から施行する。

会則改正（寄付手続き）

1 趣旨

平成 30 年度代議員会において HP に寄付口座掲載の要望及び将来的な収入源確保の必要性に関する問題提起があり、本部事務局において同案件に関する検討を実施した。

2 現状

(1) 位置付け

会則第 33 条に収入の一つとして規定（寄付手続きの規定なし）

(2) 寄付受けの実績等

ア 実績（過去 10 年）

年 度	寄付者	金 額	使 途（目的）
H25 年度	17 期個人	1,000,000 円	防大応援幟等
H27 年度	29 期期生会	351,049 円	防大法被、太鼓等
H30 年度	1 期期生会	3,000,000 円	保安大学校記念碑建立事業

※H29 年度：1 期生、26 期生会から会費未納者分（逝去者含む）の振込あり

イ 処置要領

使 途（目的）を明確にし、寄付（特別）会計として処置

3 検討事項

(1) 問題点の整理

(2) 手続きの要領

(3) HP への掲載要領

(4) 会則等の変更

4 検討結果

検討事項	検討結果
問題点の整理	○法的制約等：法人税法第 7 条の規定により納税義務は発生しない（但し税控除対象外） ○使 途（目的）：①母校の充実・発展②会員相互の親睦・交流③社会活動への寄与に集約する ○運用権限：上記目的に沿って理事会の決定により資金を運用する ○基準額の設定：基準額は設けない ○一般からの寄付受け：原則受け付けない

検討事項	検討結果
問題点の整理	○実績の公表要領：年度会計報告の中で金額と件数（個人・団体別）のみを記載する ○試行期間の設定：5年の試行期間を設け実績を見極める
手続きの要領	○「振込取扱票」に所要事項を記入の上、会費等受け入れ用 <u>ゆうちょ振替口座（当座）</u> へ入金をお願いする（寄付者データ掌握のため）
HP への掲載要領	別紙第 1
会則等の変更	別紙第 2

5 その他

令和元年度代議員会において審議し、令和2年4月1日からの実施を追求する。

寄付手続きのお知らせ

日頃より防衛大学校同窓会の活動に対し、ご理解とご協力を頂き、誠に有難う御座います。

さて、この度、防衛大学校同窓会では、これまで示されていなかった寄付受けの手続きを以下のように定め、会員各位からの寄付の受け皿を明確にすることと致しました。

寄付金につきましては、①母校の充実・発展、②会員相互の親睦・交流、③社会活動への寄与の3つの活動目的に沿って理事会の決定により運用させていただきます。

同趣旨にご賛同頂き、寄付を希望される個人及び団体（期生会等）の皆様は、下記に示す要領により郵便局備付けの「払込取扱票」に必要事項をご記入の上、お振込みいただきますようお願い申し上げます。また、事務局にご一報頂ければ、同票を送付させていただきますのでお気軽にご連絡下さい。

なお、一般の方々からのご寄付はご遠慮頂いておりますのでご了承下さい。

【問い合わせ先】

防衛大学校同窓会事務局

Tel&Fax : 03-6265-3416

E-mail : info@bodaidisk.com

URL : <https://www.bodaidisk.com/>

払 込 取 扱 票															通常払込料金 加入者負担				
02		口座番号										金 額		千 百 十 万 千 百 十 円		金 額		千 百 十 万 千 百 十 円	
002605		24826																	
加入者名 防衛大学校 同窓会															料 金		特 殊 取扱		
(B〇〇期陸・海・空) or (B〇〇期期生会) 他 住所： 氏名：															受 付 局 日 附 印				
おとことろ (郵便番号) おなまえ (電話番号) 様															受 付 局 日 附 印				
裏面の注意事項をお読みください。(郵政事業庁) これより下部には何も記入しないでください。															受 付 局 日 附 印				

各票の※印欄はご依頼人において記載してください。

※ 通 信 欄

※ 一 依 頼 人

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押してください。

切 取 ら な い で 郵 便 局 に お 出 し く だ さ い。

払 込 金 受 領 証																			
02		口座番号										金 額		千 百 十 万 千 百 十 円		金 額		千 百 十 万 千 百 十 円	
002605		24826																	
加入者名 防衛大学校 同窓会															料 金		特 殊 取扱		
おなまえ 様															受 付 局 日 附 印				
おとことろ (郵便番号) おなまえ (電話番号) 様															受 付 局 日 附 印				

防衛大学校同窓会会則

第 1 章～第 9 章 (略)

第 10 章 会計

(収入)

第 33 条 収入は、次による。

(1) 会費

(2) 寄付金及びその他の収入

(支出)

第 34 条 支出は、前条の収入をもってあてる。

(会費)

第 35 条 会費は、次の 2 種類とし、その金額及び納入要領等は細則による。

(1) 普通会費：入会時等に納入する会費

(2) 特別会費：大規模事業等の必要時に納入する会費

(寄付金)

第 36 条 寄付金の納入要領等は細則による。

(会計年度)

37

~~第 36 条~~ 本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

第 11 章 雑則

(細則)

38

~~第 37 条~~ 理事会は、本会の運営に必要な細則を定めることができる。

付則

1 本会は、昭和 36 年 1 月 26 日に発足する。

2 本会則は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。

3 防衛大学校同窓会会則第 2 条(所在地)の改正規定は平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

防衛大学校同窓会寄付金に関する細則

防衛大学校同窓会会則第 36 条に基づき、防衛大学校同窓会寄付金に関する細則を次のとおり定める。

（寄付受けの対象）

第 1 条 寄付受けの対象は、防衛大学校同窓会会員及び主に同会員で構成される団体（期生会等）とする。（その他からの寄付は原則受け付けない。）

（寄付金の納入要領）

第 2 条 寄付金は指定口座への振り込みを基準とし、口座及び振込要領を防衛大学校同窓会ホームページで周知する。

（寄付金の運用要領）

第 3 条 寄付金は、同窓会の目的に沿って理事会の決定により運用する。

付則

本細則は、令和 2 年 4 月 1 日から試行する。（試行期間 5 年）

◇平成30年度防衛大学校同窓会決算書（平成31年3月31日現在）

平成30年度一般会計収支計算書

平成31年3月31日現在

区分		事 業 等		30年度予算	30年度決算額	差 異	備 考	
一般会計	収入	同窓会費		23,880,000	24,476,024	596,024	62期:390名、個別:11名	
		預貯金利息・国債利金		1,496,000	1,636,130	140,130	国債利息増	
		雑収入		1,630,000	1,506,470	-123,530		
		収入合計（①）		27,006,000	27,618,624	612,624		
	支出	母校の充実・発展への寄与	1	各種競技会支援	390,000	543,400	153,400	
			2	期生会発会等支援	600,000	854,940	254,940	意見交換会、学生隊懇親会参加・ファイル購入
			3	学生の部隊実習支援	1,010,000	948,850	-61,150	
			4	顕彰碑献花式支援	310,000	521,117	211,117	
			5	開校記念祭支援	2,340,000	2,032,900	-307,100	支援金200万円
			6	校友会対外活動支援	1,000,000	985,000	-15,000	1委員会、18部、9同行会等
			7	学術向上策支援	185,000	215,779	30,779	優秀研究レポート15作品（陸、海、空別）
			8	同窓会著作等の寄稿	50,000	46,138	-3,862	
			9	国際交流支援	800,000	730,432	-69,568	
				小計（②）	6,685,000	6,878,556	193,556	
		会員相互の親睦交流	10	同窓会ホームページの運営	420,000	477,480	57,480	HP SSL化（保全措置）
			11	会員の慶弔業務	700,000	317,092	-382,908	物故者数84名
			12	各種競技大会による交流	360,000	291,574	-68,426	テニス・ゴルフ・囲碁各5万円、学生支援実績なし
			13	地域支部等への助成	520,000	270,000	-250,000	7コ支部、小原台クラブ×2回、3万円/支部等
			14	卒業留学生との交流	10,000	0	-10,000	防大の交流事業なし
			15	HVD支援	330,000	305,440	-24,560	42期
			16	HCD2支援	180,000	115,033	-64,967	7期
			17	HCD支援	380,000	366,939	-13,061	20期
			18	講演会・親睦会の実施	4,640,000	4,055,637	-584,363	講演会・懇親会案内状7000枚⇒380枚
				小計（③）	7,540,000	6,199,195	-1,340,805	
		社会活動への寄与	19	安全保障講座支援	100,000	100,000	0	
				小計（④）	100,000	100,000	0	
		会務運営基盤の充実	20	代議員会の実施	800,000	1,329,777	529,777	旅費、印刷費等
			21	同窓会名簿の維持	60,000	69,061	9,061	
			22	期生会名簿の作成支援	40,000	44,326	4,326	
			23	地域支部等の活性化	200,000	55,692	-144,308	
			24	会費納入の促進	680,000	808,336	128,336	
				小計（⑤）	1,780,000	2,307,192	527,192	
		検討事項	25	防大「高みプロジェクト」への貢献のあり方検討	25,000	0	-25,000	
			26	個人情報保護の在り方検討	25,000	0	-25,000	
			27	保安大学校記念碑に係わる検討	25,000	0	-25,000	
				小計（⑥）	75,000	0	-75,000	

(続き)

区分	事業等		30年度予算	30年度決算額	差異	備考
一般会計	支出	事務費	700,000	496,374	-203,626	
		通信費	350,000	289,642	-60,358	
		交通費	480,000	575,140	95,140	
		会議費	200,000	236,563	36,563	
		事務員雇用費	1,584,000	1,584,000	0	
		事務所賃貸費	5,440,000	5,334,529	-105,471	
		小原台事務局運営費	150,000	182,478	32,478	
		小計 (⑦)	8,904,000	8,698,726	-205,274	
		支出計 (⑧=②+③+④+⑤+⑥+⑦)	25,084,000	24,183,669	-900,331	
		予備費 (⑨)	1,922,000	367,200	-1,554,800	国際交流記念品購入
		支出計 (⑩=⑧+⑨)	27,006,000	24,550,869	-2,455,131	
収入総計 (①)			27,006,000	27,618,624	612,624	
支出総計 (⑩)			27,006,000	24,550,869	-2,455,131	
次年度への繰り入れ額 (⑪=①-⑩)			0	3,067,755	3,067,755	

同窓会事業予算特別会計

平成31年4月30日現在

区分	項目		予算額	決算額	差 異	備 考	
特別 会 計	収 入	1 期学生会寄贈	3,000,000	3,000,000	0		
		収入計 (①)	3,000,000	3,000,000	0		
	支 出	母校の充実・発展 への寄与	保安大学校跡地記念碑の建 立	3,000,000	2,607,334	-392,666	
		支出計 (②)					
	令和元年度寄付受領額 (③=①-②)			0	392,666	392,666	

※収支決算書（一般会計）に含まない。

◇令和2年度期生会長・代議員名簿（令和2年4月1日現在）

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏 名	海：氏 名	空：氏 名	氏名	要員
1	深山 明敏(※)	陸					
2	水野 信夫	海	高岩 利彦	水野 信夫	大庭 肇	石原 信夫	海
3	西本 徹也	陸	及川 雅道	手塚 正水	出口 哲夫	野本 眞二	陸
4	田中 厚彦	空	金田 孝之	藤岡 瑩	今西 邦大	藤田 健作	陸
5	福地 建夫	海	三浦 天士	富 一郎	齋藤 賢爾	浅野 勇蔵	陸
6	阿部 英輔	陸	池田 勝	福塚 啓二	星野 元宏	福塚 啓二	海
7	山本 安正	海	安藤 正武	高木 基博	伊藤 文夫	落合 峻	海
8	志村 隆士	陸	建部 佳平	古澤 忠彦	堀 晋介	佐藤 文彦	陸
9	磯島 恒夫	陸	小島 捷利	長崎 嘉徳	日高 久萬男	吉橋 誠	陸
10	瀬戸 正胤	空	嶋野 隆夫	坂東 勝昭	川田 哲雄	嶋野 隆夫	陸
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	阿保 文敏	陸
12	相田 哲彦	空	藤本 四郎	串田 貫治	橋本 康夫	橋本 一	空
13	牧本 信近	海	篠田 芳明	新宮領 篁	花岡 芳孝	寺口 聡	海
14	岡 利彦	海	寄田 修	斎藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	瓦谷 育夫	平山 為祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	橘 恒紀	堀 好成	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石村 澄雄	海
18	杉本 正彦	海	植木 美知男	谷村 文雄	長尾 齊	谷村 文雄	海
19	岩崎 茂	空	師岡 英行	宮浦 弘兒	下平 幸二	風間 敏榮	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	渡邊 至之	今井 恵治	陸
21	小野田 治	空	渡邊 隆	山本 高英	秦 啓次郎	山崎 剛美	空
22	宮下 寿広	陸	田原 昭彦	松下 泰士	福井 正明	石野 貢三	空
23	岩本 豊一	陸	藤井 貞文	福本 出	清藤 勝則	岩崎 親裕	陸
24	杉山 良行	空	武内 誠一	原田 哲郎	半澤 隆彦	武内 誠一	陸
25	高鹿 治雄	海	岡部 俊哉	池田 徳宏	吉田 浩介	徳丸 伸一	海
26	尾上 定正	空	深津 孔	堂下 哲郎	尾上 定正	山口 浩樹	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	丸茂 吉成	小林 茂	陸
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	真鍋 浩司	渡邊 博史	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	長島 純	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	竹平 哲也	山崎 繁	陸
31	前田 忠男	陸	山口 和則	今村 靖弘	後藤 雅人	山口 和則	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 頼昭	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空

※第1期は指定窓口会員

(続き)

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏 名	海：氏 名	空：氏 名	氏名	要員
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	斎藤 聡	沖野 克紀	沖野 克紀	空
34	佐藤 信知	空	荒井 正芳	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
36	寺崎 隆行	空	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	浅賀 政宏	濱崎 真吾	白井 亮次	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	根本 勉	陸	根本 勉	佐瀬 智之	那須 誠一郎	横尾 和久	陸
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	戸永 竜太	志津 雅啓	志津 雅啓	空
44	高橋 秀典	海	鈴木 攻佑	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	田村 弘範	海	石岡 直樹	近藤 太郎	寺林 洋平	向 康司	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	斎藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	松浦 秀俊	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一字	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一字	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	岡田 航	荒木 敬	成田 優	陸
53	濱田 卓	空	江島 宏次	松崎 圭祐	来栖 克則	濱田 卓	空
54	金沢 慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金沢 慧人	空
55	若月 豪	陸	若月 豪	中村 友哉	加治 政樹	若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	田中 結貴	舟津 貴正	松尾 聡一郎	陸
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	裕村 駿明	大藪 秀斗	我妻 国明	陸
58	河合 真	海	秋島 一弥	浦山 修太朗	河野 健	河合 真	海
59	屋代 昌也	陸	渡邊 一生	馬渡 淳司	宮川 啓一	屋代 昌也	陸
60	浜野 広大	陸	田村 洋人	畠山 尚己	庄司 和正	今尾 友哉	陸
61	久米井 勇馬	空	池上 好古	神作 友陽	工藤 将人	伊藤 龍二	海
62	上中 龍基	空	神木 康誠	唐川 航輝	江打 諒馬	熊木 礼於奈	陸
63	武石 太一	海	筒井 健司	笠原 豪	久保田 祥平	舟林 翼	陸
64	梅村 俊海	海	加藤 将悟	森田 雄也	岡野 七海	門馬 明富	陸

◇令和2年度同窓会本部役員名簿（令和2年4月1日現在）

職 名		氏 名	期	要員
会 長		岩崎 茂	19	空
副会長		岩田 清文	23	陸
		畑中 裕生	22	海
		中島 邦祐	23	空
	【統合幕僚長】	山崎 幸二	27	陸
理 事	【事務局長】	永井 昌弘	25	陸
	【事務局長補佐】	山之上 哲郎	27	陸
		鍛冶 雅和	24	海
		小野 賀三	26	空
	【防大教授】	中村 康弘	26	陸
	【統幕総務部長】	鳥海 誠司	34	空
	【陸幕監理部長】	徳永 勝彦	36	陸
	【海幕総務部長】	伍賀 祥裕	35	海
会計監事		小笠原 卓人	34	空
		本庄 俊弘	24	陸
		川上 幸則	25	陸
		高橋 均	24	海
		木村 孝	24	空

◇令和２年度地域支部等役員名簿（令和２年４月１日現在）

所属支部	役 職	氏 名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤 幸治	14	陸
	事務局長	篠原 賢治	34	陸
東北地域支部	支部長	赤坂 徹	17	陸
	事務局長	浅川 紀明	25	陸
栃木地区支部	支部長	正岡 富士夫	15	空
	事務局長	正岡 富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	西川 清	15	陸
東海拡大地区支部	支部長	赤谷 信之	6	陸
	事務局長	横山 昌宏	15	陸
関西地域支部	支部長	酒井 健	19	陸
	事務局長	大島 龍一朗	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡 元	10	空
	事務局長	山本 洋	21	陸
島根地区支部	支部長	西村 充雄	25	陸
	事務局長	持田 佳郎	13	陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空
	事務局長	永岑 富彦	10	陸
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海
	事務局長	土肥 弘実	25	海
山口地区支部	支部長	前田 房彦	13	空
	事務局長	山下 重夫	16	陸
四国拡大地域支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
徳島地区支部	支部長	福田 忠典	9	陸
	事務局長	清水 祥人	12	陸
香川地区支部	支部長	宇草 茂	18	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
愛媛地区支部	支部長	瀬川 紘一郎	10	海
	事務局長	森川 建司	22	陸
高知地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	川田 公一	16	空

(続き)

所属支部	役 職	氏 名	期	要員
九州地域支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
福岡地区支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
佐賀地区支部	支部長	福井 秀平	23	陸
	事務局長	福岡 龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	大平 愼一	20	海
	事務局長	広井 豊明	21	海
熊本地区支部	支部長	佐藤 晃章	19	陸
	事務局長	長尾 民穂	19	陸
大分地区支部	支部長	清末 純博	16	海
	事務局長	加来 仁信	23	陸
宮崎地区支部	支部長	大岐 継寛	15	陸
	事務局長	金丸 直史	19	空
鹿児島地区支部	支部長	柴村 敬二	18	陸
	事務局長	樺山 一孝	29	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜 邦夫	21	海
	事務局長	金子 賢太朗	55	空
小原台クラブ	会長（支部長）	長谷川 礼司	17	空
	事務局長	及川 正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口 千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津 悠加（黒田）	45	空

◇令和２年度事務局員名簿（令和２年４月１日現在）

部	役 職		氏 名	期別	要員
総 務	部 長		星指 隆	27	陸
	補 佐		河本 宏章	28	陸
			畠野 俊一	28	海
	担 当	総 務	平栗 浩一	29	陸
		新規事業	森竹 賢全	29	海
			坂尾 陽子	常勤	
人 事	部 長		穂積 文孝	27	空
	補 佐		佐々木 博茂	28	陸
			福應 光二	28	空
	担 当		後藤 一郎	29	陸
			渡辺 辰悟	29	陸
経 理	部 長		藤永 映章	27	空
	補 佐		間瀬 元康	28	陸
	担 当		橋口 信吾	29	海
事 業	部 長		大居 一之	27	陸
	補 佐	HCD/HVD	飯田 重喜	28	陸
		HCD2	平野 剛	28	陸
		囲碁/留学生	上野 登	28	海
		テニス/助成	鴨 明彦	28	陸
		ゴルフ/講演	遠目塚 進	28	空
	担 当	HCD/HVD	重信 勝利	29	陸
		HCD2	荻原 洋聡	29	海
		囲碁	大林 一洋	29	海
		国際交流/留学生	中村 浩之	29	陸
		テニス/助成	松宮 康一郎	29	空
		ゴルフ/講演	西村 弘文	29	空
広 報	部 長		花田 順一朗	27	陸
	副部長		橋口 裕則	27	空
	補 佐	人材バンク	多出村 秀勝	28	陸
		機関紙	相原 武士	28	空
		HP	白井 一弘	28	陸
	担 当	人材バンク	坂間 輝男	29	陸
			鶴見 知樹	29	陸
		機関紙	大嶋 基司	29	空
			佐々木 輝幸	29	海
		HP	時藤 和夫	29	空
			大森 俊之	29	陸
	技術指導		村田 和美	17	陸

◇令和２年度小原台事務局員名簿（令和２年４月１日現在）

部	役 職	氏 名	期別	要員
小原台 事務局	事務局長	中澤 省吾	37	空
	事務局長代理	中澤 信一	28	海
		村上 強一	31	空
		染谷 真次郎	43	陸
	事務局長補佐	滝口 和男	41	陸
		相原 渉	36	陸
		内田 貴司	28	空
		小堀 紀子	40	海
	事務局長業務管理	中村 尚人	49	空
	事務局員	中澤 信一	28	海
		村上 強一	31	空
		染谷 真次郎	43	陸
		宮島 麻衣	53	陸
		甘中 晴彦	33	海
		川嶋 隆志	36	海

◇会則改正（「防衛大学校同窓会会則」 目的及び事業）

1 趣旨

同窓会の組織が完成期を迎え、同窓会事業のこれまでの実績と現況を踏まえて目的及び事業の記述の優先順位を変更する。

2 現行の規定

（目的）第4条

本会は、会員相互の親睦、母校の発展及び社会活動に寄与することを目的とする。

（事業・活動）第5条

本会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び活動を行う。

- （1）会員相互の親睦・交流に関する事業
- （2）母校の充実・発展に資する事業の協力と援助
- （3）防衛意識の向上・普及活動
- （4）社会活動に資する事業
- （5）その他前条の目的を達成するために必要と認める事業と活動

3 改定後の規定

（目的）第4条

本会は、母校の充実・発展、会員相互の親睦・交流及び社会活動に寄与すること等を目的とする。

（事業・活動）第5条

本会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び活動を行う。

- （1）母校の充実・発展に資する事業への協力と援助
- （2）会員相互の親睦・交流に関する事業
- （3）社会活動に寄与する事業
- （4）防衛意識の向上・普及活動
- （5）その他前条の目的を達成するために必要と認める事業と活動

4 改定理由

以下により、「母校の充実・発展」を先に記述する。

- （1）防衛大学校・学生に対する期待の高まり
- （2）同窓会に対するニーズが逐年拡大し、同窓会も対応
- （3）会費納入の合理性（新規会員の納得）
- （4）優先順位と記述の順番の整合

5 その他

- (1) 本改訂に併せ、(組織)第3条4項の「防衛庁」の記述を「防衛省」とする。

また、「・・・並びに海外支部とし」を「・・・海外支部ごととし」と修正し、表現を前文の「基地等ごとに」と整合させる。

- (2) 改定後の規定

(組織)第3条4

支部は、原則として防衛省職員である会員（以下「現職会員」という。）については各駐屯地・基地等ごとに、また防衛省を退職した会員（以下退職会員という。）については会員が居住する各都道府県単位に組織する地区支部又は拡大地区支部、地区支部を統括・調整する地域支部及び複数の地域にわたる本部直轄支部並びに海外支部ごととし、その構成及び運営要領等は細則による。

- (3) 令和元年度代議員会において審議し、令和2年4月1日から施行する。

◇会則改正（寄付手続き）

1 趣旨

平成30年度代議員会においてHPに寄付口座掲載の要望及び将来的な収入源確保の必要性に関する問題提起があり、本部事務局において同案件に関する検討を実施した。

2 現状

（1）位置付け

会則第33条に収入の一つとして規定（寄付手続きの規定なし）

（2）寄付受けの実績等

ア 実績（過去10年）

年 度	寄付者	金 額	使 途（目的）
H25 年度	17期個人	1,000,000 円	防大応援幟等
H27 年度	29期期生会	351,049 円	防大法被、太鼓等
H30 年度	1期期生会	3,000,000 円	保安大学校記念碑建立事業

※H29年度：1期生、26期生会から会費未納者分（逝去者含む）の振込あり

イ 処置要領

使途（目的）を明確にし、寄付（特別）会計として処置

3 検討事項

（1）問題点の整理

（2）手続きの要領

（3）HPへの掲載要領

（4）会則等の変更

4 検討結果

検討事項	検討結果
問題点の整理	○法的制約等：法人税法第7条の規定により納税義務は発生しない（但し税控除対象外） ○使途（目的）：①母校の充実・発展②会員相互の親睦・交流③社会活動への寄与に集約する ○運用権限：上記目的に沿って理事会の決定により資金を運用する ○基準額の設定：基準額は設けない ○一般からの寄付受け：原則受け付けない

検討事項	検討結果
問題点の整理	○実績の公表要領：年度会計報告の中で金額と件数（個人・団体別）のみを記載する ○試行期間の設定：5年の試行期間を設け実績を見極める
手続きの要領	○「振込取扱票」に所要事項を記入の上、会費等受け入れ用 <u>ゆうちょ振替口座（当座）</u> へ入金をお願いする（寄付者データ掌握のため）
HPへの掲載要領	別紙第1
会則等の変更	別紙第2

5 その他

令和元年度代議員会において審議し、令和2年4月1日からの実施を追求する。

寄付手続きのお知らせ

日頃より防衛大学校同窓会の活動に対し、ご理解とご協力を頂き、誠に有難う御座います。

さて、この度、防衛大学校同窓会では、これまで示されていなかった寄付受けの手続きを以下のように定め、会員各位からの寄付の受け皿を明確にすることと致しました。

寄付金につきましては、①母校の充実・発展、②会員相互の親睦・交流、③社会活動への寄与の3つの活動目的に沿って理事会の決定により運用させていただきます。

同趣旨にご賛同頂き、寄付を希望される個人及び団体（期生会等）の皆様は、下記に示す要領により郵便局備付けの「払込取扱票」に必要事項をご記入の上、お振込みいただきますようお願い申し上げます。また、事務局にご一報頂ければ、同票を送付させていただきますのでお気軽にご連絡下さい。

なお、一般の方々からのご寄付はご遠慮頂いておりますのでご了承下さい。

【問い合わせ先】

防衛大学校同窓会事務局

Tel&Fax : 03-6265-3416

E-mail : info@bodaidesk.com

URL : <https://www.bodaidesk.com/>

払 込 取 扱 票										通常払込料金 加入者負担	
02		口座番号								金額	
002605		24826									
加入者名		防衛大学校 同窓会								料金	
通 信 欄		(B〇〇期陸・海・空) or (B〇〇期期生会) 他 住所： 氏名：								特殊 取扱	
ご依頼人		おとことろ (郵便番号) おなまえ (電話番号)								受付局日附印	
裏面の注意事項をお読みください。(郵政事業庁) これより下部には何も記入しないでください。											

払 込 金 受 領 証									
口座番号		002605							
加入者名		防衛大学校 同窓会							
金額		24826							
ご依頼人		おなまえ							
料 金		受付局日附印							
特殊取扱		様							

防衛大学校同窓会会則

第 1 章～第 9 章 (略)

第 10 章 会計

(収入)

第 33 条 収入は、次による。

(1) 会費

(2) 寄付金及びその他の収入

(支出)

第 34 条 支出は、前条の収入をもってあてる。

(会費)

第 35 条 会費は、次の 2 種類とし、その金額及び納入要領等は細則による。

(1) 普通会費：入会時等に納入する会費

(2) 特別会費：大規模事業等の必要時に納入する会費

(寄付金)

第 36 条 寄付金の納入要領等は細則による。

(会計年度)

37

~~第 36 条~~ 本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

第 11 章 雑則

(細則)

38

~~第 37 条~~ 理事会は、本会の運営に必要な細則を定めることができる。

付則

1 本会は、昭和 36 年 1 月 26 日に発足する。

2 本会則は、令和 2 年 4 月 1 日から施行する。

3 防衛大学校同窓会会則第 2 条(所在地)の改正規定は平成 27 年 4 月 1 日から施行する。

防衛大学校同窓会寄付金に関する細則

防衛大学校同窓会会則第 36 条に基づき、防衛大学校同窓会寄付金に関する細則を次のとおり定める。

（寄付受けの対象）

第 1 条 寄付受けの対象は、防衛大学校同窓会会員及び主に同会員で構成される団体（期生会等）とする。（その他からの寄付は原則受け付けない。）

（寄付金の納入要領）

第 2 条 寄付金は指定口座への振り込みを基準とし、口座及び振込要領を防衛大学校同窓会ホームページで周知する。

（寄付金の運用要領）

第 3 条 寄付金は、同窓会の目的に沿って理事会の決定により運用する。

付則

本細則は、令和 2 年 4 月 1 日から試行する。（試行期間 5 年）

◇会則改正（地域支部支援）

1 趣旨

同窓会本部から支部への助成について、新たな要望があったことから、支部からの要望を取り纏め、検討を実施した結果、支部助成基準を修正し、5年間の試行をすることとした。

2 支部助成の現状と問題点

（1）支部助成の現状

従来の助成基準	各支部への助成実績		
	平成29年度	平成30年度	令和元年度
社会的貢献効果 または広報効果	徳島（阿波踊り） 関西（カッター大会）	徳島（阿波踊り）	徳島（阿波踊り）
講演会の講師 に対する謝金	鳥取、小原台クラブ、東海、九州、小原台クラブ、熊本 計6件	大分、鳥取、東北、小原台クラブ、大分、九州、小原台クラブ、熊本 計8件	東北、小原台クラブ、鳥取 (計3件)
優勝カップ 購入	なし	なし	(なし)
ホームページ 立ち上げ	なし	なし	(なし)
上記以外の要望 は個別に審査	なし	なし	(なし)
執行額	8件 24万円	9件 27万円	(4件 12万円)
予算額	52万円	52万円	52万円

（2）支部助成の問題点

毎年の執行額は予算額の半分程度で、支部の活性化を促進するための助成制度が有効に活用されていない。

3 助成要望と検討結果

支部からの助成要望を取り纏め、検討を実施した結果、助成基準を以下のとおり修正することとした。

従来の助成基準	助成要望	対応	理由
なし	総会	追加	会務運営基盤の充実のため、支部の総会に助成して支部の活性化を促進
社会的貢献効果 または広報効果	阿波踊り等への 助成の継続	継続	阿波踊り等は広報効果があることから、助成を継続
講演会の講師 に対する謝金	謝金その他、 旅費・日当等	修正	使途を謝金に限定せず、支部の講演会に助成して支部の活性化を促進
優勝カップ 購入	なし	継続	実績も要望も無いが、将来的にも無いとは言えず、基準としては継続
ホームページ 立ち上げ	なし	継続	実績も要望も無いが、将来的にも無いとは言えず、基準としては継続
なし	入校予定者への 激励品代	助成 せず	未だ防大生ではなく、通常は入隊予定者激励の一部として各地本が実施
なし	部隊実習生への 激励品代	助成 せず	公平性から本部事業として支援済み本部経費での一部支部助成で不公平化
なし	部隊記念行事に出 席する会費・旅費	助成 せず	一部の地域の特性であり、本部から一律に助成することは困難
上記以外の要望 は個別に審査	なし	継続	実績も要望も無いが、特殊な要望への対応として、基準としては継続

4 支部助成基準（5年間の試行）

- ・地域支部等の総会（1万円）
- ・現職会員と退職会員が協力して支部として参加する行事で、同窓会の社会的貢献効果または広報効果が認められる事業（3万円）
- ・地域支部等が主催する講演会（3万円）
- ・県単位以上の支部が主催するスポーツ行事において、
「防衛大学校同窓会」を銘記した優勝カップの購入（3万円以下）
- ・地域支部等が新たにホームページを立ち上げる場合（1回限り）（2万円）
- ・上記以外の要望は、理事会で個別に審査

5 細則の改正

防衛大学校同窓会細則第9号「防衛大学校同窓会における地域支部等に対する支援に関する細則」を改正して、第1条第2項で助成基準を規定した。

防衛大学校同窓会における地域支部等に対する支援に関する細則

防衛大学校同窓会会則第38条に基づき、防衛大学校同窓会における地域支部等に対する支援に関する細則を次のとおり定める。

地域支部等に対する支援の基準は、次のとおりとする。

（地域支部等に対する支援）

第1条 地域及び本部直轄支部に対する支援は次のとおりとする。

1 支部設立時の支援基準は下表のとおりとする。

支援区分	設立準備金	活動支援金
地域支部	10万円	50万円
本部直轄支部	5万円	10万円
地域支部隷下の 地区支部	5万円	

2 地域支部等に対する助成基準は次のとおりとする。

- ・地域支部等の総会（1万円）
- ・現職会員と退職会員が協力して支部として参加する行事で、同窓会の社会的貢献効果または広報効果が認められる事業（3万円）
- ・地域支部等が主催する講演会（3万円）
- ・県単位以上の支部が主催するスポーツ行事において、「防衛大学校同窓会」を銘記した優勝カップの購入（3万円以下）
- ・地域支部等が新たにホームページを立ち上げる場合（1回限り）（2万円）
- ・上記以外の要望は、理事会で個別に審査

（期生会発足に対する支援）

第2条 期生会の発足に対する支援基準は次のとおりとする。

- 1 期生会発足時に、設立金として100,000円を支援する。
- 2 防衛大学校卒業時に、活動支援金として100,000円を支援する。

付則

本細則は、令和2年4月1日から試行する。（試行期間5年）

■編集後記

令和元年度機関誌「小原台だより」は、ホームページにご寄稿頂きました方々、取材に応じて頂きました方々、各行事及び事業においてご協力を頂きました方々のお蔭様をもちまして無事発刊することができました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

第23号から電子版としての発刊を開始致しましたが、今回の第27号で電子版第5号を発刊する運びとなりました。また、編纂においては、これまで同様にホームページのアーカイブとしての記録保存の意義を重視して同窓会の年度のまとめとして役立つように努めております。引き続き電子版「小原台だより」のご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

(防衛大学校同窓会本部事務局機関紙担当記)